

# Alchemiastory 【故郷 を忘れた2人の秘密の冒 険記】

rekko

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

産業革命前夜

「鍊金術」が生活を変えていく中で

世界に点在する「魔王」達と

魂を与えられた動物「魔物」

それらが作り出した「魔法」の存在が  
民を脅かしていた

「魔」を絶つことが、

若者の正しい生き方とされていた時代

彼女達もまた、旅立ちます

ほんやりとある「正義」のため

そして自分の居場所を見つけるために――

レツコとそのYOMEのラトの2人の冒險です

(ハーメルンで書くの初めてなんで暖かい目で見てください)

# 目 次

懐かしく不思議な世界とエディアール

1

公国の酒場

滅びの村と魔物

嘘つきな魔物

フランクとの再開

商人と武器

フランクの企み

交渉成立

裁き

第2ラウンド

一件落着

49 41 36 31 24 20 17 13 7 4

64

謎の宗教

救済者 ケイト

ご飯

幸せな夫婦喧嘩

魔王? 再び

魔王、再び

市場へ行つてみよう

ガチャと不思議な鳥

パートナーとの別れ

110 103 98 93 89 85 79 72 67 59 53

お久しぶりの友人達

次の目的地

不老不死の村

インモルターレ





# 懐かしく不思議な世界とエディアール

それは突然の事だつた。

自分の周りにある風景はどこか懐かしい雰囲氣があつたが、思い出すことができない。

草木が生い茂り、大きな池がある自然に囲まれた場所。

「ここは…」

自分の手や体は特に問題は無い。

よく状況を理解出来ず混乱している中、目の前に黄色と緑：色々な色が混ざつた穴が出てきた。

「うわっ……何コレ…」

思わず虫でも見たかのような反応をしてしまつた。

けどこの穴からは「不気味」とか「怖い」などの感情が出てこない。

これは一体…。

穴を集中して見ていると急にパツと光つた。

あまりに急で警戒もしていかつたので、異常な眩しさを抑えることが出来ず視界が

真っ白に染まる。

するとほんやりと老人の姿が映し出されて來た。

「よくぞ参つた！旅立ちの時を迎えた勇敢なる子よ！」

「ん？」

目が回復する中、老人の姿はどんどんハツキリと見えるようになつてきた。  
ちょうど現実と見分けがつかないくらいになると、老人はまた口を開いた。

「ワシはエディアール。かつて英雄を目指し、冒險に立つも、故あつてこの地にて村長となつた者じや」

「あ…レツコつす。気づいたらここに居て……」

名乗り返すと、エディアールと名乗つた老人は「そうかそうか」と言うように微笑み、話を続けた。

「鍊金術により、人々の生活は大きく変わつた。しかし、人の理は変わることが無い。成人を迎えた者はみな冒險の旅に出る。それが世の傲い、人の在り方である」  
成人を迎えた者…？

そういえば私は成人しているのだろうか。

多分していなうと思うのだが…。

エディアールに成人とは何か聞こうとしたが、エディアールは少し顔をしかめ

「強くならねば生きられぬ世界」と言つた。

その言葉に、少しだけ寒気がした。

つまりは弱肉強食。

弱ければ強い者に食われるだけだ。

だが何故だろう。そこまで怖いとかそういうわけじやない。

私は生き残ることが出来るという思いがある。

戦いの指南をしてやろうかと言うエディアールに、必要ないと伝えようとした時、突

如視界が歪んだ。

なんだかグラグラと揺らされているような感覚がする。

画面酔いなんてしたことは無いが、画面酔いしている気分だ。

とりあえず大丈夫だということを伝えなければ…。

「エディアールさん？え？」

グラグラと揺らされ視界が悪い中、そこにはもうエディアールは居なかつた。

混乱に混乱が重なり、余計に頭の収集がつかなくなつて更に気持ち悪くなる。

「ちよつと……まつて……普通に……きもちわる……」――

# 公国 の 酒場

「ねえ起きてつて。もう行くよ」

シユリンガ一公国 の酒場で昼食を食べた後、少し休憩して寝てしまつたパートナーを  
僕は起こす。

いつもなら肩をトントンと叩くだけで、起きるけど今日はなんか眠りが深いのかなか  
なか起きない。

「起きてつてば」

強めに叩いても特に反応は無く、少しもぞもぞと動くだけ。

このくらいすれば、いつもなら「痛い」とか言つてめちゃめちゃ睨んでくるのに。  
ていうかそれを覚悟してやつたんだけど。

あれ、おかしくない？

チップさん何か入れたのかな……いや、ないか。

「ねえつてば！」

あまりに起きず、ちょっと頭にきたので、力いっぱい彼女を揺らす。  
机も少し揺れ、机の上のコップが少しカタカタ動く。

「きもちわるい」

「え、ごめん大丈夫!?!」

やつと反応があつたと思つたら不調を訴えてきた。

「きもちわるい」と言つたレツコは少し顔色を悪くし、今にも閉じそうなまぶたを頑張つて上げながら半目でこちらを見てくる。

「なんか変な夢見た気がする」

頭をおさえながら何とかレツコは立ち上がりけのびする。

寝覚めが悪いのはいつもの事だが今日は一段と悪い。

疲れていたのか、無理やり起こすのは悪かつたかな。

「ごめん。でもそろそろ行かなきや。変な濡れ衣着せられちゃつてるんだから」

「チツ……あんのクソジジイめ……なんの証拠もなく冒険者疑うとか頭わいてんじやねーの?！」

「いやめっちゃ口悪いね?落ち着こ?・」

レツコの機嫌が悪いのには理由がある。

僕達はついこの間冒険を始めたばかりだつた。

アブル連邦から始まり、神の加護を受けた後にここ、シユリンガー公国までやつてきたのだ。

それまではよかつたけど……。

公国に来ていきなり、国の兵士長フランクから「武器を盗んだ」などと勝手なことを言われた。

違うと言つても「その場に居たから」とか言う理不尽なことを言われたり。

ここでレツコは静かに中指を立てていた。

しかし、罪なき人間を裁いたとなると国の威信にも関わり、盗んだのが人間ではなく魔物という事もあつたので、無実だと言うなら真犯人を捕まえろということになつた。「さつき女の人から聞いたでしょ。街の前で武器を持つ魔物が東の村の方向へ歩いていくのを見たつて情報。多分滅びの村……ステイグマだよ」

僕は机に地図を広げ目的地に指を指した。

するとレツコは大きく背伸びをし、首をポキポキとならしまるで不良のような仕草をした。

あ、機嫌悪いなこれ。

「んじや早く行つてボッコボコにすんぞ」

「武器取り返せば良いんだけどね」

僕は口と機嫌の悪い彼女と共に、酒場をあとにした。

# 滅びの村と魔物

「流石公国。人が多いね」

酒場から出ると、私のパートナー、ラトは綺麗な青い目を輝かせて言った。  
確かに連邦よりかは少し人が多いかもしない。

でも今私はそんなのどうでも良かつた。

というかそれどころじやなかつた。

「早く魔物見つけて武器取り戻すよ」

「あ、ちよつと言ひ方優しくなつたね」

私はこの何秒かも我慢できなかつたが、ラトは気にしていなかつたようだつた。

公国を出て、私達は雪山と草原を駆け抜ける。

シユリンガー公国付近には雪があつたものの、降りて来るとだんだん雪はなくなつていき、代わりに草木が生い茂る草原が出迎えてくれる。

途中ジヤガイモを探つたり、ゲルミやコノミが体当たりしてきたりと色々あつたが、なんとか10分程度で滅びの村に着いた。

滅びの村は自然豊かな場所だった。

なんだか懐かしさを感じる村。

そこまで広い村ではなさそうなので、魔物もあまり遠くではないかもしれない。  
まずは聞き込みかというところでラトがなにかに気づいた。

「このあたり……人が住んでないね。自分達で頑張るしかないみたい」

こんな天気のいい日だ。人一人くらい外に居てもおかしくないのに誰もいない。

あたりを見渡してあるのは草、木、花、橋……そして左の道から下に行けるようだ  
がそのための橋が壊れていた。

「レツコ！先に行っちゃうよ！」

ラトを見ると、もう奥の方に進んでいたらしい。

「ごめんごめん。何か手掛かりになりそうな物は？」

ラトは静かに首を横に振った。

小走りでラト方へ行きながらも、周りの様子を探る。

人が住んでる気配はさらさらなかつた。

「教会もある……まだ上に行けるみたい」

少し開けた場所に教会があり、また上に続く道があつたのでそれを登る。

上を登ると村の頂上だつた。

そこにはなにか施設のようなものと、青いネズミのようなものが見えた。

「ねえ、あのネズミつて……」

「可能性はある……ていうかあれじやなきや困る」

ネズミはその施設の中に入つていつたので急いでおいかける。

中に入ると、そこは炭鉱のような場所だつた。

「山掘つて作つたのか。道理で壁が岩ばっかりなわけだ」

「線路も引いてある……。あ、ねえあそこ！」

ラトが指さしたところには、ポツンとトロツコが置いてあり、その手前に魔物はいた。  
「私は偉大なる王。不死身のトッポ様だ。なんのためにここに訪れたのか、言わずとも

わかる」

腕を組んでトッポと名乗る魔物は偉そうに言つた。

多分、ただ単純に自分を倒しに来たと思つてゐるだろう。

王とか言つてるし多分名前あるみたいだし、おそらく魔王だろうか。

あまり認めたくはないが……。

「ここにいる魔物が、武器を盗んだと聞いて来たんだけど？」

「盗んだとは聞こえが悪い！そもそも世界の全ては大地のもの。誰のものでもない。所

有という考え方には人間が、

人間の中で取り決めた事で我々魔物には関係ない！」

その言葉を聞いて、ラトはこっちを向き、呆れた顔をしながら「ダメだわコイツ」みたいな目で訴えてきた。

魔物にも少なからず所有という概念はあると思うが

話が長くなりそうで面倒なので、早めに奇襲でもして叩こうと思い背中に担いでいる星夜銀漢杖に手をのばすが、その瞬間にトッポと目が合う。

余計な事をすると何が起るかわからない。

そつと手を下ろし、奇襲をするという思考を辞める。

「我々一族は、古来から、お前ら人間共に殺され続けている」

トッポは武器を取ろうとした私を睨みながら話を続けた。

「子供にすら、『お小遣いを稼ぐ』という理由で襲われるのだ。人間に恨みがないはずがない！」

悲しそうな、悔やむような、恨むような、トッポの色々な感情が混ざり合い、言葉がこちらに飛んでくる。

「確かにそれはそうだけど…今の時代、皆生まれた時から剣を持つ人だつているし…」「もしかしたら本当はそれがおかしいのかもね。時代のせいにしちゃいけないけど。だ

けど今は今なんだから仕方ない」

私が仕方ないと言つたことが納得出来ないのか、ラトはうつむき、綺麗な青い目を曇らせた。

「だからこそ、王たる私は行動を起こしたのだ。」

人間の住む地に敢えて城を構え、一族を守るため、我々を殺す『武器』を運び出し、人間を弱体化しようとな！」

「それはわかつた。でも武器は國の人間の物。返して貰わないと困る。ていうかアンタが盗んだせいで濡れ衣着せられてるから一刻も早く返せ」

「本音絶対後者でしょ…」

ラトの呆れきつた声は小さく消え、代わりにトッポの自信満々な声が再び響く。

「よかろう、武器は渡してやつてもいい！」

「お、物分りのいいネズミだな。好かれるよ～お前」

「ただし！魔物のルールに従つてもらう」

「魔物のルール…？」

心中でガツツポーズをとつていた私の期待を裏切つたトッポは得意げに言つた。

「魔物の世界は力こそ全て！言うことを聞かせたいのなら俺様に勝つことだ!!」

「前言撤回。誰にも好かれることなく死にやがれ」

トッポが構えようとする前に星夜銀漢杖をつかみ、セラファイムウイングを放つ。トッポが怯んだ隙に、ラトが水晶刃を叩き込む。

セラファイムウイングで起こった風と、水晶刃の冷氣であたりは散らかってしまった。砂埃が舞い、ドライアイスのように冷気が黙々と上がる。

10秒ほど、誰も行動を起こさなかつた。

周りが見えるようになつてくると、そこには大の字で倒れたトッポがいた

# 嘘つきな魔物

大の字で倒れているトッポに、2人は安心などはしていなかつた。

むしろ警戒し、武器を構えたままで疑問を抱いていた。

「連續で攻撃したとはいまだ2発だよ？もしかしたら気絶してるフリかもしねない」

「じゃあ起きてきたらデュアルアーツ。私がジャッジメントでラトがペネトレイト」

「了解」

2人がずっと倒れているトッポに武器を構えて数秒後、トッポの指がピクっと動いた。

その瞬間をレツコは見逃さなかつた。

「よし。動いた。やろう」

「嘘でしょあんな細かい動きで!?」

ほんの少しあな動いていないトッポに、レツコは大きく飛び上からジャッジメントで攻撃する。

その場所には大きな光の柱が現れた。

ラトはやるしかないと悟り、デモンブレイド・フレイムの先に意識を集中させ、光の

柱が消えたタイミングで勢いよくトッポを貫いた。

トッポは宙を舞いそのまま地面に叩きつけられ、再び大の字で倒れた。

それでも2人が安心した様子はない。

顔を見合わせ互いに驚いた。

「……消えない…？」

「……完全に死んだわけじゃないの…？これ」

魔物は普通、倒されたらその場で消えるが、2人の前に倒れている魔物は消えなかつた。

が、流石に起き上がりがれないと、2人は武器を納めた。

「くつ……このトッポ様に勝つとはな……貴様はよっぽど名のある戦士なのだろう…」

突然、聞こえるはずのない思っていた声が聞こえ、その声を聞いたラトは驚き、レツコは呆れた。

「やっぱり死んでなかつたんだ…！」

「ていうか名のある戦士って……んなわけあるか。こちどらランキング外の戦闘力なんだから……」

あれ、ランディング外の冒険者でも勝てるつてそれ魔王としてどうなの？とレツコは思いついたように言つたが、トッポはバツが悪そうな顔をしたあと、少しニヤツとした。

「ていうか早く武器返して。返してくれるんだろうが」

もちろん、とトッポは言い頷くが、それだけではなかつた。

「しかし、知つてゐるか。約束を守らぬことは魔王の嗜み。武器はすでに、人間の商人に売つてしまつたのだ!!」

鈍器で頭を殴られたような感覚が2人を襲つた。

武器を返してもらえないどころかそれを商人に売つてしまつたのだ。

一方トッポは高笑いしながら話を続けた。

「武器が欲しいなら商人から買うがいい！やつは公国の中場に居ると言つていたな

……」

「ふざけてんじやねえぞネズミが」

「ストップ。杖で殴る気？」

武器でそのまま直接トッポを殴ろうとするレツコの腕をラトは掴んで後ろに引いた。

「それよりも後ろに気をつけろ。ほら、魔物がいるぞ！」

笑つてゐるトッポの発言に反応し、咄嗟に後ろを向いた2人だつたが、そこには何もいなかつた。

「何もいな……嘘か……」

急いで前を向くも、トッポは姿を消していた。

そして、どこからか

「次こそは負けぬ！」

と、聞こえた。

「ラト」

「何？」

「次は殴る」

「わかつた」

倒し、復活され、騙され、また騙され、怒りよりも呆れの方が強かつたが、レツコは  
イライラして思わず地面を蹴つた。

「とりあえず酒場に行こ？ここにいても何もできない」

「そうだな。ついでに酒場の宿も取つとこうか」

「お腹すいたからご飯も食べたいね」

さつきよりも落ち着いてきた2人は、他愛のない話をしながら公国へ向かつた

## フランクとの再開

公国に入ると、奥の方にある城の前あたりにフランクさんがいた。とりあえず事情だけでも話しておこうとフランクさんに近づくと、フランクさんは僕達を小馬鹿にするような顔をしてこちらを向いた。

「おや、お前らか」

その声は少しづわざとらしく驚いたような声だつた。

「……どうした？ 真犯人を倒すことはできたのか？」

「はい。トツポという魔物が犯人でした」

「ほほお、トツポが犯人だつたといふか」

フランクさんは顎に手を当て、困ったような素振りを見せる。

隣のレツコをみると、なんだか顔が強ばつていた。

「どうしたの？」

「いや……なんでもない」

なんでもないような表情をしていたが今僕にはわからなかつた。

フランクさんはキヨロキヨロとあたりを見渡し、

「ならば、盗まれた武器はどうしたのだ？」  
と機嫌が悪そうに言つた。

「酒場にいる商人に売ったとか言つてたんよ」

「うんうん。酒場にいる商人に売られたと」

イライラ氣味に訴えるレッコとは真反対に、軽い声で言つたことをリピートし、少し口角を上げているフランクさん。

「しかし、な」

それもつかの間、フランクさんは眉が垂れて再び困り顔に戻つた。

「それが真実かはわからない。肝心の武器がなければ、無実を証明したとは言えぬ」「でも……！」

「商人に尋ね、武器を取り戻して来るのだ。さすれば、王より褒美も貰えよう」

僕の発言に被せるように、今度は怪しい笑顔を浮かべて言つた。

「ここまで来ると、流石の僕でも気持ち悪さを感じる。

「しかし、取り戻せないときは……きちんと罰を受けてもらうからな。私はもう少しここで待つていてやる。酒場にいるという商人に会つてくるが良い」「そうさせていただきます。行くよ」

「えつちよつコケるコケる！」

ニコニコしたり、しかめつ面になつたり、本当に気味が悪くて僕はレツコの手を引いて酒場まで走つた。

後ろから「やめろ」というレツコの声は、走るのに必死で耳に入らなかつた。いつもはあまり僕から動く事は少ないので、レツコは意外なことに少し驚いているようだつた。

「ストップストップ！ラトが先先行くなんて珍しいね？」  
酒場の手前でブレーキをかけられる。

「ごめん。流石にあの人はヤバいなつて思つて……」

「あつた時からヤバいんじやないかとは思つてたけどさ……。なんとなく……なんとなくアイツらグルなんじやないかつて思つて」

レツコの意見を聞いて、フランクさんの表情の移り変わりの激しさがなんとなくわかつた気がした。

可能性はある。

僕はさつきまでの走つた勢いが殺され、自分から進む気なんてさらさらなかつた。

そんな僕をレツコは「しようがないな」と言うように口角を少し上げため息をつき、酒場の入口のドアを力強く開けた

## 商人と武器

酒場に入るとすぐ、赤いバンダナを巻いたガラの悪い商人と目があつた。

商人は常に口角があがつており、こちらをみると軽々しく声をかけてきた。

「よお！そろそろ来る頃だと思つてたぜ！冒険者さんよ」

僕達が来ることをわかつていた時点ですでに怪しかつた。人は見かけに寄らないとは言うが、この人は例外だと思う。

レツコは「グルかもしれない」と言つていたが、早速その可能性が高くなつた。

「うちは公国にも採用される、一流の武器を取り揃えているのさ」

「へえ……」

商人は自慢げに言う。

すると声のトーンが変わり、囁くように、

「必要なんだろ?!俺の武器が、無実を証明するために……」

と言つた。

「なんで知つて……まさか」

「おつと！仕入先は秘密だぜ？」

他の人に聞こえるとまずいのか、レツコの言葉に被せるように商人は言つた。

「これは黙つておいた方がいいよ。余計な事言うと武器が貰えないかも」

「わかった」

商人に聞こえないよう、静かに隣にいる短気なパートナーに呟く。  
今回は快くわかつてくれたようだ。

「わかりました。それで……武器は？」

僕が聞くと、商人は腕を組み、

「欲しければ1つ10万ゼル。全部で200万ゼルだ」

値段の数字ごとに人差し指、中指と立てていく。

「えつ」

僕達は同時に声が出た。

「レツコ、ちょっと」

レツコの肩を持ち、後ろを向いて少し身を縮める。

「今いくら持つてる？」

「5万ゼル……て、は?! 買うつもり?! あつても無くてもバカ正直に買うわけないでしょ

?!」

「しつ！ もうちょっと声のボリューム落として」

自分達の少ないお金を見ながらコソコソしていると、商人が痺れをきらし、口を開いた。

「ん？なんだ？高いとでも言うのか？……あのな、俺は無理してお前らに売らなくともいいんだ。どうせ国が買い取ってくれるんだからな」

「くそつ……」

レツコが悔しがつていると、商人は情けをかけるかのような事を言つた。

「……ま、直ぐに払えとは言わねえよ。支払いは後払いでもいいんだぜ？」

「けどどつちにしろ金はないんだけど」

商人は、まるで「わかってねえな」と言うように、ニヤリしながら首を振つた。

レツコは理解出来ず首を傾げ僕を見るが、僕にも商人が考へてる事はわからない。  
「褒美、とやらを貰えるんだろう？それを回してくれれば支払えるんじやないのか？」  
「あつ……」

商人はお金のことになると頭がよく回るのだろうか。

悪知恵なのか商人の脳なのかわからぬが、その方法ならできるかもしねりない。

「そもそも、国にべつたりの商売も潮時かなと思つててな。まあ、考えておいてくれ」  
言う事だけ言って、商人は手をヒラヒラと振りながら酒場の奥の方に消えていった。  
「一応、あのジジイに言つとく？」

「フランクさんね。一応言つておこうか……何となく結果は見えてるけど……」

どうせ行つたところで、武器が取り返せなかつたから罰するとか言うのだろう。

「アイツは私達を犯人したいだけ。理由もあるはずだからつけ回すだけつけ回して尻尾掴めば……あとは勝てる」

だからほら、行くよ！と彼女は僕の手を掴んで酒場から出ようとする。

あまり気が乗らず、僕の足は動かなかつたが、彼女の根気に負けてそのまま僕達は外に出た。

外出るとすぐ、あまり見たくなかった人が立っていた。

# フランクの企み

「おいおっさん!!」

ラトの手を掴みながら勢いよくフランクにぶつかる。

「お、気をつけろ!」

威厳のある、いかにも兵士長というような表情と声でフランクはこちらを向いたが、私達とわかつた時、表情が一気に緩み声も頗りなさそうな声になつた。

「……なんだお前らか……。どうだ、武器は取り返せたか?」

「莫大な金を要求された。今の私たちには無理だ」

フランクはさつきとは違い、「へえ、そうだつたのか」というような表情だつた。  
つまり……とフランクが口を開いた。

「無理だつたみたいだな。ならば、覚悟を決めることだな」

「ていうか真犯人のトップは倒した、別にいいことじやないの?」

国が買うとまずいのか知らないが、フランクは険しい顔で「いいことではないな」と

言つた。

やはり、怪しい。だが、なんの根拠も無しにそういうのは私が不利になつてしまふ。

「まあ…お尋ね者になりたくなければ、王宮を訪ね、自ら処罰を受けに行くがいい」

勝利を確信したような様子で、フランクは酒場へと行つてしまつた。  
どしどしと歩くその後ろ姿はまるで王様のようだつた。

「あれは絶対なんか企んでる。酒場行くぞ」

「ええ……やつぱり？……て、あれ？」

ラトが俯いたとき、何かを見つけた。

ラトはそれを拾うと驚いたような声を出し、瞬時に顔を上げた。

「レツコー！これフランクさんの財布かも……。凄く重い。持つてみてよ」

少し興奮気味にラトは財布を差し出す。

仕方なしに持つてみると、それは私の予想を上回る物だつた。

「確かに重い……。ていうかこれ使つて武器買おうよ」

私の突然の提案に、ラトは一瞬「確かに」と納得したが、すぐ首をぶんぶんとふり、「ダメだ」と否定した。

「それを取つたら本当に罰受けちやうよ!! フランクさんに届けなきや！」

「でも返すためにはフランクさんに会わなきや行けないよねえ。確かフランクさんは酒場に行つてたような気がするなあ」

多分自分は、ここ一番ウザく、ドヤ顔をしてニコニコしているだろう。

ラトは、私への呆れ、酒場に行きたくない気持ち、不安、色んな感情がごちゃ混ぜになつたのか、頭を抱えた。

その数秒後、「あつ」と何かを閃いたらしい。

「教会に届けようよ！」

「あんなのが教会に用事があると思う？。しかもそんな大金、教会において大丈夫？」  
が、私が思つた事をそのまま言うと、もう諦めたのか下を向き、ため息をついた。  
「こういうのって論破つて言うんだつけ？なんか違うか。ま、とりあえず酒場には行く  
からな」

諦めたラトは右手を私に差し出すだけで、後は何もしなかつた。

引つ張れと申すか。

「つたく……ほら行くよ！」

ラトを引つ張り酒場に入る。また来たのか？という驚きの表情をするチップさんは  
気にせず、あたりを見渡す。

すると、奥の方に先程見たフランクがいた。

酒樽や荷物なんかで隠れて見えにくいやが、もう1人居た。

赤いバンダナがチラリと姿を見せた。

「まさか……ラト、下向いてる場合じやない、こっち来い！」

私の右手が掴んでいる彼の左腕は、力が抜けており、彼自身も脱力感が見てわかる状態だつた。

そんな彼を無理矢理引つ張り、近くの酒樽の影に隠れる。何かを喋つてゐるようなので、注意して耳を済ませるとだんだん声が聞こえてきた。

「マルクよ。お主も悪よの」

『『ワル』か、悪くねえ響きだ。だが、旦那程じやねがな』やはりあの二人はグルだつたか。

こんな予想が当たつて嬉しいとは到底思えない。

考えていたことが、テストが終わり暗記したものが全てなくなつていくかのように、頭から吐き出された。

「お前の買った武器を国が買う。それをまた盗ませて……」

「旦那…………声が大きい！」

体の力を抜いてたせいで、重要な情報を逃すところだつた。

やはりコイツら、グルだつた。

「おつと…………少し酒が入るとな……」

「チツ…………！」

仲間の危機感の無さに呆れ、怒りするマルクに、フランクは、にやけ顔こそ抜けてい

ないが申し訳なさそうな顔でマルクに謝った。

「怒るな怒るな。これからもよろしく頼むぞ」

「旦那も尻尾掴まれないように気をつけな」

2人が不気味な笑みを浮かべながら約束を交わしその場を去ろうとした。

「あ、行つちやうよ、そろそろ出れば？」

その時、ラトがやつとやる気を起こした。

「復活が遅い。これではつきりしたろ？ アイツらが真犯人だ」

少し大袈裟にガタガタと音を立て、私達が樽の影から2人の前に姿を現すと、案の定、幽霊でも見たかのような反応をされた。

「お前ら……まさか、今の話……どこから聞いていた……？」

先程まで酒が入り真っ赤だったフランクが、みるみるうちに青ざめていく。

「残念ながら結構始めの方から聞いてたよばーか！」

「兵士長ともあろう人が何してんですか！」

「ダメだ旦那！こいつら捕まえて沈めようぜ」

いつもは私を止めてなだめるラトも、役職的な意味で怒っている。

そこそこ大きな声で色々言つているのに誰も気づいていないのは奇跡だろう。

これ以上続けるのもマズいと感じたのか、意外にもその流れを止めたのはフランク

だつた。

「まあ、待て。街の中だ。事を荒立てて兵士を呼びたくない。どうするつもりだ。私たちを。この国の王、ドレイク大公に告発するか？」

「まあ普通ならそうしますよね」

「それも結構」

今の彼は、さつきまでの青ざめた顔ではなく、余裕のある顔をしていた。

酒のせいにはわからないが完全に調子に乗っている。

「だが、私はこの国で要職を務める身。小さな正義を振りかざして訴えても私の言うことをお前らの言うことと、どちらを大公陛下が信用してくれると思う？」

「旦那はムダに上つ面はいいからな。陛下からの信頼も厚いときだ」

「上つ面がいいは余計だ」

冗談を交え、愉快そうに笑う2人だが、そこには自分の役職を存分に利用し、まさに勝ちを確信しているような態度も見えた。

自分の仕事は責任を持つて全てこなすような性格を持つラトは、この二人を見てどう思つてゐるのだろうか。

横を見ると、予想通り嫌そうな顔をしていた。

その表情を見て、どういった考えを出したのかはわからないが、フランクは割に合わ

ないような事を言つた

「しかし、私は優しいんだ」

「はい？」

「私とこいつの話は忘れる。そして立ち去れ。お前が生きる道はそれだけだ」

フランクは、マルクと私達を交互に見ながら言つた。

この話をここで王が聞いていれば、なんと言つていただろうか。  
厚く信頼していた者が、まさかこんなことをしていたと知れば、疑いながらも軽い刑  
を下すかもしれない。

いくら考へてもあまりいい答えが出てこない。

これ以上考へても無駄だ。

「殴るのは流石にやめてね」

「いやしねえわ」

実際こいつを殴つたらまた罪が重なるだけだ。

仕方なしに、私達は酒場を立ち去つた。

# 交渉成立

外にでると、どこからか陽気な鼻歌が聞こえた。

それは私達のように悩みを抱えているような者ではなく、今をとても楽しんでいるような者が歌っているようだつた。

鼻歌はどんどん近づいてきて、私達の真ん前にまで來た。

「あれ？……あれあれえ？」

おどけたような声の金髪の女の子。両サイドに三つ編みをしており、頭の上の大きなリボンとちょこんと見えるアホ毛は、彼女の性格を表しているようだ。

顔を見ると、どこか見覚えがあつた。

「あなた達、前に国境沿いでシンシアちゃんを助けてくれた人達ですよねえ。その節はお世話になつたですう」

思い出した。メイドのミーナだ。シュリンガー公国に向かう途中、腹を痛めていたメイドを助けた。この子はその時に付き添つていた子だ。確か薬のレシピもくれたはずだ。

「おやおやあ？何やらあまり氣の晴れない顔つきですねえ。困ったことがあるなら相談

に乗りりますよう

ミーナは私とラトの顔をチラチラと不思議そうに見た後、言つた。

「どうする？」

「まああつちが良いつて言つてくれてるし……」

財布を持つたラトが不安そうな顔をする。

正直、会つた時からどこか抜けているようで、脳天氣なところがあると思つていて、あまり相談や難しい話が出来そうな子ではないとばかり思つていたが、彼女も国のメイド。

それにあつちから相談に乗つてくれると言つてているのだ。国のメイドなら兵士長とも繋がりがありそなうので何か情報が聞けるかもしれない。

「実は……フランクさんの財布を拾つて……」

「え？ お財布ですかあ！ フランク兵士長の!?」

「そうそう。でも今お城に行つても武器を盗んだ疑いで罰を食らうから……」

「届けると王様に罰を受けちゃうんです？……どういうことですかねえ？ それは尋常じやない自体ですねえ」

ミーナは驚きながらも私達の話を聞いてくれた。

彼女も彼女なりに考えてくれているらしく、少し悩むポーズをとつたあと、閃いたよ

うに口を開いた。

「シンシアちゃんならどうにかしてくれるかもしませんよう。後でお城に来てください！」

「ん？シンシアちゃんが？……て、ちょっと！」

なぜシンシアちゃんのかがよくわからないまま、ミーナはお城まで駆けて行つてしまつた。

「追いかけよう。どうせお城に行くんだし損は無いよ」

「ん？……だな」

私達もミーナを追つて城の近くまで走つたが、綺麗な大きな桜の木が2つ聳え立つ城の前には何故かマルクがいた。

「げ、マルク」

「げ、つてなんだ、げ、つて」

マルクを見て思わず心の声が漏れてしまつたが、マルクは特別嫌そうな顔をしているわけでもなかつた。

むしろ、私が持つているフランクの財布を見て、「おっ!?」と目を輝かせた。

「お前ら随分と持つてるな？」

「あ、これはむぐつ」

「ん~?? そうかな~??」

ここでフランクとバラしたらマルクはフランクチクるに決まつて。ここは知らない振りをするため、急いで事情を説明しようとしたラトの口を塞ぐ。

マルクは財布をまじまじと見た後、明るい顔で話し始めた。

「ふーん。こりや、いつちよ稼げるかもしれないな!さつきは随分とふっかけちまつてすまなかつたな。その金で、武器を売つてやつてもいいぜ」

私は心の中でガツツポーズした。これでなんとかなる。

だが、ラトは機嫌の悪そうな顔をして、私とマルクを交互に見つめていた。

「なに躊躇してるんだよ。お前らが助かるためには俺にその金を渡して武器を受け取る。そしてお前らは武器を受け取つて、城に行つて褒美をもらう。それでいいじゃねえか

「ラト。今はこの話に乗つといた方がいいぞ。まあラトの性格上、納得はできないかもしないけど褒美を受け取らないつて選択肢もある。そこはラトが決めていいから」

「いや、いいよ。これで僕達の疑いは晴れるしフランクさんにも一泡吹かせれるかもしないし」

ラトはこういう、人を騙したり何かを盗んだりする事が苦手だ。

だからこの話もあまり乗り気では無い。だが今回はフランクへの怒りが強いため、案

外すんなりとOKされた。

私達の話を聞き、フランクの財布を受け取るとマルクは力強く頷いた。

「話は決まりだ。この財布は頂いておくぜ。城に着くくらいのタイミングで武器は届けに行つてやる」

「おっしゃ。んじやよろしくお願ひします」

「よろしくお願ひします」

マルクが急いで武器を取りに行つたと同時に、私達はさつきよりも落ち着いた、余裕がある状態で王の間へ向かつた。

# 裁き

城に入り王の間に入れてもらうと、玉座に座っていたこの国の王、ドレイク大公陛下がゆっくりと立ち上がった。周りにはメイドが5人、ドレイク王に沿うように並び立つており、その中には先程見たミーナとの間助けたシンシアも並んでいた。

そしてその脇にはあのフランクも得意げな顔をして立っていた。緊迫した空気が漂う中、最初に口を開いたのはドレイク王だった。

「武器庫から武器が何者かに盗まれておる。それを盗んだのは主らだと、フランクより報告を受けているが、相違はないか？」

腕を組み、真っ直ぐ私たちを見つめずつしりとした重い声で話すドレイク王。やはりフランクから聞いたのなら私たちを疑うか。

早速ラトが焦りの表情を見せた。

「それは……！」

「待つてください！」

ラトが説明しようとすると、ナイスタイミングでマルクの声が聞こえた。

「主は出入りの商人……。名は、確かマルクといつたか」

「その通りで」

マルクは武器を持つて走ってきたにも関わらず、息切れひとつしていなかつた。  
武器を王に見せながら、私達の弁護をしてくれた。

「この人は犯人じやありやせん。この通り、武器も無事取り戻してきやした」

王はふむふむと相槌をうつており、ちゃんと話は聞いてくれるようだ。  
一方フランクは、グルだつたマルクが急に変な行動をしたのが不快なのか、顔をゆがめていた。

それでもマルクの弁護は続く。

「そもそも武器を盗んでいるのは魔王トッポ。奴を退治して武器を取り戻したのが、ここにいる冒険者様でさ！私はその荷物運びを頼まれたんでさあ」

ここまで言うと、マルクはこちらを見て「どうだ、いい感じだろ」と静かに笑いかけてきた。

これを話が終わる度にやられたらいつかバレそうだ。

「怪しまれるからあんまりこっち向かないで」

「小声でもそういうの言わない方がいいよ」

ラトに注意され、再び目線をドレイク王の方にやると、ドレイク王はどこか納得の行かない顔をしていた。

「うむ……。マルクよ！そこに直れ！しばしこの話に付き合つてもらおう」

「は、はあ……」

マルクを解放するかと思えば、マルクをこの話に付き合わせるらしい。

マルクは予想はしていなかつたものの、特に大袈裟に驚くわけでもなく少しポカンとしてその場に片膝を着いた。

ドレイク王は顔をしかめ、フランクの方を向いた。

「どういうことだフランク。報告とは話が違うではないか」

その声は、いたずらをした孫を叱る老人のような少し優しめな声に聞こえた。

これに対しフランクは青い顔をしているんじやないかとワクワクして見てみるが、全くもつてそんなことは無かつた。まだまだ余裕の表情で、ドレイク王の質問に答える。  
「どんでもございません。あいつらは商人に武器を売ろうとしていて私めがそれを発見し、阻止させたのでござります」

よくまああんな嘘が息をするように出てくるもんだ。よくよく考えてみればそんな嘘を考える暇はいくらでもあった。

私達が呆れて、次は誰がどう出るかを考えていた時、玉座の方からまたも聞き覚えのある声がした。

「あ、あの、よろしいでしようか」

「あ、君は確か」

私が反応すると、特徴的な2つくりの女の子は「そうです」と頷き

「ご無沙汰しております。シンシアです。その節はお世話になりました」

と、丁寧にお辞儀をした。その後直ぐ彼女は仮面をしてフランクの方を向いた。

「フランク兵士長。この方々はそんなことなさいません。私を無償で助けてくれた素晴らしいお二人です」

「ふむ。うちのメイドがそう言うのであれば主らが正しいのであろう。まずは褒美をとらそう」

今度は何も考へるような動作は一切見せず、即答だった。兵士長よりもメイドの方が信頼が強いようだ。

あれだけ自分は信頼が厚いだのお前らの話は聞かぬだの自分を棚に上げていた割にはメイドに負けているじやないかと、私は勝手に心の中で笑っていた。

フランクが王に言つたことはもう信じては貰えないだろう。今度こそ青くなつてゐるのではないかと期待しながら横を見るが、なんとまだ余裕ぶつこいた顔をしていた。

「冒険者よ。無実が証明できてよかつたな。では、下がれ！」

「フランク、待て」

余りにも張り切った声で言われたので一瞬そのまま従いそうになつたがコイツよく兵士長なんて今までやつてこれたな。さつきまで自分の言つていたことなんて全て忘れ、というか無かつたような様子で話を締めようとした。

しかしあ王はそれを許そとはせず。

「どうかされましたか」

あからさまに嫌そうな顔をするフランク。

どうやら聞かれたくない事がありそうだつた。

「どうしたものこうしたもさつきと言つてることがちが……」

「ストップ。ドレイク王が言いたいのはそういう事じやないみたいだよ。一旦下がつて」

ラトの指示通り、中つ腹になつて思わず前に出ていた右足を引っ込め、話を聞く体制になると、ドレイク王は咳払いをして口を開いた。

「私は、以前も同じような話をした覚えがある。冒険者よ。なにか話すことがあるのではないか。我に真実を聞かせよ」

私達の裁きの後はフランクの裁きときた。

ちょうど良かつた。言いたいことは全部こつちで吐かせてもらおう。私達の戦いの

第2ラウンドが始まつた

## 第2ラウンド

レツコヒラトはフランク達の悪事を話した。トッポの事や、酒場で話していた事も全て。

そしてレツコは濡れ衣を着せられた事も訴えたが、前者のショツクが大きくて耳には入れてもらえないがつた。

「ふむ。フランクが魔物に盗ませた武器を、マルクが魔物から安く買い取り、それを我が国が買い取っている。そういうのだな？」

「はい。あと武器を盗んだ犯人を私たちに」

「フランク、それは真実か？」

「滅相もございません」

「ねえ」

彼女の小さな（レツコにとつては小さくないかもしねないが）不満は無かつたかのように話は着々と進められていく。

「では説明してもらおう。我が国はマルクから武器を買つている。それに相違はないか？」

「仰せの通りです」

「ではそのマルクはどこで武器を仕入れている?」

「これマルクピンチじゃない?」

レツコはどこか嬉しそうな声でラトに囁いた。

そんなレツコを見てラトは不思議そうな表情をする。

「なんでそんなに嬉しそうなの……」

「だつて仕入先聞かれて嘘ついてそれがバレたらまあ……面白いかなつて?」

「性格悪いな……」

「ではマルク。答えよ。武器は魔物から買い取っているのか?」

ちょっとワクワクしているレツコと、それに呆れているラトはマルクに視線をやつた。

どんな嘘をつくのか少し楽しみにしていたレツコだが、マルク表情を見ると、特に焦っているわけでもなく、平然としていた。

「そのようなことも、あるかも知れやせん。しかし仕入先は商売が種。王様といえど明かすわけにはまいりませんや」

「主の言う通りだ。理解しよう」

「え、アリなの?」

「アリ……っぽいね」

予想外の2人のやりとりに、レッコはもちろん、ラトも驚いた。王に隠し事をするのはいけないとは思っていたが商人でこの理由は通じるらしい。

ドレイク王もそれは仕方ないと納得すると、フランクに視線を移した。  
「ではフランク。何度も盗まれ続ける武器。警備を強化しても一向に被害が減らないのは何故だ？」

「それは……」

フランクにはマルクと違い、誤魔化すための言い分が無いようだ。

「盗んだのが魔物ならば、人間の法では裁けぬ。しかし、人間が手を引いて、誘導しているのであれば……」

ドレイク王に睨まれ、フランクは息を飲んだ。

「その人間は裁くべき存在である」

「まさか陛下は、我々がわざと武器を盗ませていると仰りたいので？」

「では我が国の兵士はそれも防げぬほど無能なのか？フランク」

だんだんとドレイク王が不機嫌になつてきてている事が、言われなくとも皆がわかる程度になつてきた。

兵士が無能ということは兵士長も無能と思われてもおかしくない。

「滅相もない事でござります」

フランクは必死に首を振つて否定した。

「そうだ！そそのかしたのはこの冒險者ではないでしようか。商人が武器を届けに来たことが、その証拠です」

素早く切り替えてキリツとした顔で、またもやレッコ達に濡れ衣を着せようとするフランクに、レッコは思わず反論した。

「そうだ！じやねえよ逃げんな。お前また……」

「気持ちはわかるけど落ち着いて」

「ミーナはどう思う？」

王の考えている事はわからない。いきなりメイドに、しかもミーナに話を振つた事に、レッコは不思議に思つた。

ミーナはわざとらしく、

「あれえ、そう言えばあ。マルクさんのお財布、フランクさんとおそろいなんですねえ。  
仲良しさんですう」

といつも以上にニコニコして言つた。

マルクに矛先が向くとは思わなかつたレッコは、首をマルクに向けたまま固まつた。

マルクもまさか自分に、しかも財布について触れられるとは思つていなかつたのか思

わず声が出る。

「おそろい!?え?」

「私の財布が……ない！」

マルクは財布を、フランクは自分のポケットや小物入れなどを焦りながらキヨロキヨロと見回す。

しかしこれはチャンスでは、と思つたフランクは直ぐに怒つた顔をしてマルクを睨みつける。

「マルクめ！私の財布を抜いた不届き者め！きっと犯人はこのマルクです！」

「どんでもねえ。この冒険者が持つてたんでさあ」

「でも僕達盗んだわけじゃなく……」

ラトが説明しようとすると、すかさずミーナの助け舟が入った。

「さつき冒険者の人が届けなきやつて言つてたのを聞いたんです。その事を前もつて陛下に伝えておいたんですよ」

そういつたミーナの表情は先ほどと同じようなニコニコした顔で、でもどこかイタズラが成功した子供のような笑みも含まれていた。

そんな彼女の意外な有能さにレツコは心の中で感謝した。

「フランクよ」

「はい」

「あの財布には相当な大金が入っているのではないか?」

「左様で」

フランクが答えると、ドレイク王は先程と別人のように声を張り上げた。

「どうやつて稼いだ!?」

「そ、それは……コツコツと貯めて……」

「……先程から話に真実が無きこと。気づいておるか?」

「は、ははあつ!」

ついに誤魔化しも効かぬ状態で追い詰められ、ようやく彼は観念した。

そこに追い打ちをかけるようにメイド長が酒場の主人、チップを連れて來た。

「あ、どーも。これはこれは陛下。ああ、このお二人さんねえ、よく来てましたよ。うちの店に」

「この2人はどんな事を話していたか申してみよ」

「いやあ、いくらなんでもお客様の話に首を突っ込むほど私も野暮じやないんでねえ」

いつも陽気なチップも流石に王の威圧には負けたようで。頭を困ったようにかいていたが、やがて遠慮しながらも口を開いた。

「でも、そここの兵士長さん。近頃随分と羽振りがいいみたいですね。何年も溜まつてた

ツケも全部払つてくださつたし、最近は頼まれるお酒も多いと来た」  
チップが機嫌良さそうにフランクの行動を話していく事に、フランクの焦りはもはや  
目に見える程になつていた。

「何年も溜まつてたのを全部？高いお酒も頼んでるの？」

「ああ。全く上得意様ですよ」

「お前……！客である私のことをペラペラと……！」

チップは悪気のない、素直な笑顔で言うが、フランクにはそれが怒りにも、恐怖に  
も感じられた。

「申し訳ないですねえ。陛下の話せというご命令は断れませんよ、さすがにねえ。」

「兵士長、随分と羽振りがいいようだがその金はどこから手に入れた？軍の給与はそれ  
ほど変わつてないようだが」

王のフランクへの呼び方が変わつた。疑われた者の証言、メイドの証言、そして酒場  
の主人の証言を聞いた上で、もう兵士長を悪と確定したかのような質問だつた。

「いや、その……ちょっとした臨時の収入が……。……どこからでもいいじゃないです  
か！」

「そもそもいかぬ。疑惑がかかつてゐる今、そなたにはそれを明確にする責務がる」  
「ちゃんとした理由があるなら言えるよね？しつかり証明しなよ」

「それとも、証言できないんですか？」

「そ、それは……」

冒険者2人と王の冷たい目線、声、メイドやチップの視線、グルだつたマルクさえも全て敵に見え、フランクはもう手の打ちようが無かつた。

この場にいる全員が自分の敵。フランクにはそのプレッシャーに耐える精神はもうなかつた。

「兵士長を連れて行け。そこの商人もな。裏で話を聞かせてもらおう」

「待つてくだせえ。安く買って、高く売るこの何が悪いんです？」

「国の財政に無用な負担をかけたのならば、国として罰を与えるが適当ではないか？」

何とか商人のルールで先程のように罪を回避しようとするも、ドレイク王に一喝され、黙つて奥へ連れていかれた。

ようやく、長い裁きが終わつた。

# 一件落着

フランクとマルクが連れていかれたあと、シンシアはホツとして胸を撫で下ろした。

「本当に良かつたです。おかしな罪を着せられないので」

「いえいえ。本当に助かりました。ありがとうございます」

ラトがシンシアちゃん達に深々と頭を下げる。彼女達がいなければ、私達の無実どころかフランク達の悪事さえ暴けなかつた。私も感謝の意を込めて頭を下げる時、ラトは私のようなガサツな者がお礼をすることに驚き、シンシアちゃんはすぐに頭をあげてくれと言つた。

「ここで私は、忘れかけていた疑問を思い出した。

「ところでシンシアちゃんはどうしてここに？前は連邦に向かつてる途中だつたよね

？」

「ああ、申し訳ありません。私、この国の君主であるドレイク大公陛下にお仕えするメイドなのです。メイドとは……陛下のお仕事を多岐に渡つてサポートする秘書のようなものなんですよ？」

シンシアは少し焦りながらも丁寧に自己紹介をしてくれた。

メイドといえば、私達にはメイドの友人がいる。主人と一緒に暮らしているが、最近は会つていなかつたので今はどうしているのか、ふと気になつた。

しばらく瞼を閉じて私達の会話をじつと聞いていたドレイク王が、そろそろいいだろうとゆつくりと目を開き話を切り出した。

「兵士長の企みを暴いてくれて感謝する。やつの巧みな隠ペイに愚かな我々は気づけなかつたようだ。まずは褒美を取らせよう」

王はそういつた後、少し考えるように私達をじつと見た。これだけでは足りないかもしれないとでも思つてゐるのだろうか。

正直な話、別に褒美はいらない。例えそれがお金だつたとしても私とラトは丁寧にお断りする。最初から褒美なんて求めていないし、何ならフランクとマルクを罰せる事が私達には褒美以上の嬉しさがある。

「他に……礼と言つてはなんだが、何かあつたら我の力を貸して進ぜよう。いつでも城を訪ねるがいい」――

「ふう……やつと終わつた……」

私は長く、半分面倒だつたあの状況をやつと終わらせた事にとても安心感を抱いていた。

と同時に、溜まつていたストレスやら疲れもどつと出てきたため、私の目は座つているだろう。

「荷物も増えずに済んだし、お金はちょっと余裕できたし、疲れたし早めに宿とつておこうか」

そんな私に比べてラトはスッキリとした顔で機嫌良さそうに私の隣を歩いている。ご褒美は、ラトのおかげでなんとか丸く納まつた。お金は10分の1だけ貰い、あとは教会に寄付、その他のご褒美も私達以外の困っている物に与えてくれとラトは言った。王もなんとか納得してくれたらしく、あの場から解放されるのは意外にも早かつた。

「ゲルミアヒージョ。ゲルミアヒージョ食べたい」

「はいはい、チップさんに作つてもらおうね」

なんてことない、平凡な話をしながら酒場に入ると、先程までフランク達の事情を話してくれたチップさんの元気な声が聞こえた。

ラトは「先程はありがとうございました」と一礼をし、私は座るための席を探した。

もう夕方のため、酒場は夕飯を求める冒険者達が多く賑やかであつた。席が見つからず酒場をそろそろ1周する頃、1人の女の子が席を立つのが見えた。

「あ、空いたかも。あそこ行こうよ」

「待つて、もう1人いるよ」

それを聞いてよく見ると、確かにもう1人が座っていた。早く座りたいという気持ちが強く、周りが見えていなかつたようだ。

仕方ない、立ち食いだとラトに言おうとした時だつた。

「あれ、レツコ、ラト。久しぶりだね」

そこで私は会いたかつた友人に会えるなんて思つてもいなかつた。

# お久しぶりの友人達

先程席を立つた女の子が、ちょこん、と目の前にいた。

肩につくかつかないかくらいの桜色の髪。輝く黄色い瞳、髪に隠れてチラリと見える赤い左目。驚きで一瞬何かわからなかつたが、足元から頭まで順に見ていくと共にだんだん記憶が鮮明になつてきた。

「レイ？」

「そうだよ。久しぶりすぎて忘れてた？」

苦笑いして顔を覗き込む彼女はサーヴァントのスカートをひらひらさせ、どこか嬉しそうだった。

「ホントに久しぶりだね。1人なの？」

レイ、もといレイティはどある国に、主人と2人で暮らしている。公国からは遠いので、1人で来ることはなさそうだ。と言うより、彼女は1人でも大丈夫かもしれないが主人の方がさせないと思う。

「いいえ？あそこにあるじやない。見えない？」

彼女が手を伸ばした指の先には濃いめの桃色の綺麗な長髪を持つ人が、頬杖をついて

優雅に座っていた。

コーヒーの入ったカップに手を伸ばした時、サラサラと髪が揺れ探していた顔が見えた。

目付きの悪い顔。間違いない。

「リツティイ!!」

「れこちやん！ラトちゃん！1年ぶりじゃないかしら！」

言葉遣いは女性のものであつたが、その声は男性のものだつた。しかし、少し高めの声であり、そこまで気に触るものではない。

先程見た目付きの悪い顔は消え、優しい笑顔がこちらを照らす。

私達に気づくなり両手をバッと広げ「こっちにおいで」と言わんばかりに手招きをする友人に、何も変わつていないようで安心していた私達。

が、嬉しさのあまり顔以外を見ていいなかつたので、違和感に気づいた瞬間、勢いよく走つていた足が急ブレーキをかけた。

「リツティイ……服……どうした……？」

「この1年で何があつたの……?!」

違和感の正体は彼……リーテインの服。

彼はちよつとした貴族の生まれであり、前にあつた時はマントやら綺麗なローブやら

貴族が身につけるにふさわしい衣服を着ていた。

だが今はどうだろう。明らか貴族のするような格好ではない青いジャージに身を包んだ彼を見て私達は開いた口が塞がらなかつた。

「えつとね～。まあ色々あつて……。まあまあ!! とりあえずお座りなさいよ! せつかく会えたんだから一緒にお食事したいわ～!」

何かを誤魔化すように左の頬に左手を当て、右手で手招きするというなんともおばちゃんのテンプレのような仕草をするリー・ティンに思わず苦笑いする。

「事情は後で話すからさ。とりあえずご飯食べよ? 席空いてないでしょ」

「いいの?」

「もちろん」

「じゃあ、お言葉に甘えて」

席の問題はラトとレイティによつて解消され、私はレイティのとなり、ラトはリーティンのとなりで、無事席につくことが出来た。

——で、何でリッティイそんな格好してんの?」

欲していたゲルミアヒージョを頬張つて私は聞く。ゲルミアヒージョはこれでもかという程青く、食欲をそそらないが口に入れると結構美味しい。実際、私もそうだつたし

出された瞬間顔をしかめたレイティも今はその虜になつてゐる。

「その……ちょっとやんちゃしたと言いますか住んでた所を失つたと言いますか……」  
目を逸らしながらモゴモゴと話すリーテインの声は周りのガヤガヤとした音からなんとか聞こえる物だつた。

レイティは申し訳なさそうに額に手を当てて静かに私達に言つた。

「魔法の練習して家が吹き飛んだのよ」

「いや何してんの？」

「要するに逃げたと……」

「いやもうホント……私はいいけどレイちゃんに申し訳なくて……」

今、うなじに大きな岩でも乗つてゐるかのように俯いているリーテインには漫画など  
でよく見るズーンとした描写が似合うだろう。

1人ジメジメとした空気を漂わせる中、周りは構わず騒いでいる。

「私はリーテイン様に何があつても付いて行くと誓つたのですから私の心配はしなくて  
もいいのです。それよりも、家以外に貯金も飛んだのですからこれからどうするか考え  
なければ……」

流石はメイド。主人よりもしつかりしてゐる。

お金も飛んでいるという事は、持つていた物以外に、着ていた服すらも売ることに

なったのだろう。なんとなくジャージの理由は察せた。

「じゃあレイの服は？その服も結構高価そうだけど……」

ラトが言つたレイティの服とは、サーヴァントGのセット。赤色の結構お高そうな物だつた。

「流石に従者の服売る訳にも行かないでしょ。しかも女の子。てかレイちゃんにそんな事させてたまるか」

「とりあえずレイが大切ってのはわかつた」

リーテインは真面目な顔でラトを見つめながら言つた。ラトはその圧力に耐えられずもうやめろと謝つているがリーテインはまだまだ不満そうにラトをじつと見ていた。

「もう死ぬまでやつてろ」

私が2人に呆れていると、レイティがハツとして話しかけてきた。

「2人は宿取つたの？この人数じゃもう満員になつてもおかしくないけど……」

「あ」

気づいた時には時既に遅し。急いでチップに聞きに行くもさつき埋まつてしまつたらしい。

レイティはなんとなくわかつていたのか対策を考えしていくれたらしい。するといい案を思いついたのか、私の手を掴んで少し嬉しそうに提案をした。

「ねえ、もし良かつたら私達の家に泊まらない？滅びの村の1件を借りたの」  
リーテインも直ぐに反応し、ラトを見ていた虚ろな目にだんだんと光が宿つた。  
パツと立ち上がりテキパキと用意をして私達を担いだ。

「いいじゃない！ そうと決まつたら早く帰るわよ！ レイちゃんお会計お願ひ！」

「はい！」

「おい待て」

指示をしたリーテインも、それに従つたレイティも、目がキラキラしていた。  
そして私達はウキウキのリーテインに担がれたまま滅びの村まで直行した。

## 次の目的地

カーテン越しの優しい光が顔にあたり、自然と目が覚めた。

自分はベッドで寝ていたようだが、どうして寝ているかがわからない。

重い上半身を起こしかつたりを見回すと、少し丸い形をした部屋に、上手いことタンスがあつたり棚がつけられていたり、とても落ち着いた住みやすそうな場所だつた。

そんな部屋に感心していると、ドアがガチャリと音を立てて開いた。

「あ、レッコ起きてたんだね。おはよう。昨日すぐ寝ちゃつてたみたいね。ご飯出来たらから早めにおいで」

レイティが私を起こしに来たらしい。

作つてすぐ来てくれたのか、ふんわりといい匂いがする。

「ラト達は？」

「もう起きてるよ。まあ遊んでるけど。」

呆れたように言いながらカーテンをシャツと開ける。カーテンから漏れていた小さな優しい光が大きな眩しい光へと変わり、電気のない薄暗い部屋を優しく包み込んだ。「まだ寝たいなら寝てもいいけど……起きる？」

「起きる」

急いでベッドから飛び起き、部屋を出るレイティに続いた。

螺旋状の階段を下るとリーテインとラトがテーブルを挟んでカードを持つていた。カードの束が2つあり、キツチリと綺麗に重ねられているものとバラバラに重ねられたものがあつた。見たところUNOをしているようだがリーテインの様子がなんだか変だ。

「ウノ!! ねえウノ!!」

「遅い。僕が出したからウノは無効。一枚引くだけだよ?」

「イヤアアアア!!!」

ただのしようもない物乞いだった。頭を抱え絶叫するリーテインの気持ちは私達に伝わることなく夢く消えるだろう。

「朝からうるさいな?」

「あ、レツコおはよう」

「おはよう。待たせてごめんね」

項垂れているリーテインの横に座り、レイティが作つたりエットに手を合わせる。薄く切られたパンに肉を乗せ、口に運ぶ。

ラトが鍊金術で作るものも美味しいが、レイティが鍊金術を使わず作る料理は、前か

ら美味しい。

前よりも美味しくなっているきがする。

ご飯を食べながら楽しく会話を弾ませる。ラトと食べる時も楽しいが、こんなに楽しい朝ごはんは久しぶりだ。

昨日私がいつから寝ていたか聞くと、なんとリーテインに担がれ運ばれている時に寝ていたらしい。ラト曰く、「あの状況で寝れるなんて相当鈍い人じやないと無理」とのこと。

鈍くて悪かつたな。

「そういえば2人は次行く所とか決まってるの?」

「いや?でもずっと根付く気は無いよ。冒険し始めたのはついこの間だし色々なところに行きたくな」

自分の思つている素直な気持ちを打ち明けると、リーテインは考えるポーズをとつた。

「ん……」と声を出した後、思い出したように「あつ」と手を叩いた。

「なら、インモルターレに行つてみたらどう?」

「イン……? なにそれ

「その村に行くと不老不死の術をかけてもらえるらしくてね。今は不老不死の村つて呼

「ばれてるわ」

「不老不死？それほんと？」

「不老不死」という単語にラトは疑問を抱いた。

「知らないわ。でも興味あるなあら行けばいいし、行くところないから行くっていうのもありよ。まあ、どちらにせよ貴方達は行くことになるとと思うけど」

どうやらレイティの言っている通り、私達はその不老不死の村に行くことになるだろう。

ラトは不老不死について調べるため、私は行く所が見つからぬいため。

理由に違いがあるが結局目指す場所はまとまつた。

お皿に乗った最後のひとつパンを口に放り込み、「ご馳走様でした」と手を合わせる。

少し休憩を入れ、身支度を済ませ、リーテインとレイティにお礼をいい、私達は不老不死の村へ走つて向かつた。

お借りした方

リーテイン様

レイティ様（YOME）

63 次の目的地

ありがとうございました。

# 不老不死の村 インモルターレ

不老不死。普通の人は「不老不死」という言葉にどんな思いを抱くだろうか。恐ろしい、羨ましい、とにかくいろんな思いがあるだろう。

不老不死の村は一見、荒れていたりするものなのだろうかという想像もあつたが、そんなことは無く、とてもどかで自然豊かな空気が澄み渡った場所だった。

滅びの村と似ている雰囲気だが、あの場所と違ったここには人がいた。村の入口の高い場所から下を見下ろし、あまり多くない人を眺める。

あの人達も不老不死で、もう何十年何百年も生きているのだろうかと考えると複雑な気持ちになる。

「ラト。ほら道わかれてるよ。坂道と階段どっちがいい?」「いやどっちでもいいけど」

しようもない話をして、坂道の方を進んでいく。途中にある小屋の様なものの中には肉が干されていて、干し草が積まれた荷台が置かれている。いかにも「村」という感じがした。

「ようこそ、この村へ、冒険者様」

「ん？」

後から声がして振り返つてみると、いかにもチャラそうな男が立っていた。右目がクリーム色の髪で隠れている。なんかチャラい。

「いや、わかっているよ。鍛え抜かれたその体、見栄えする美しい顔。あなたは伝説の勇者様でしょう？」

いきなり話しかけてきてろくに相手の話も聞かずすかずかと話を進め、更には勝手に伝説の勇者にされた。正直言うと気持ちが悪い。

普通に「伝説の勇者」なんて棚に上げられるのはそんなに嬉しくないし何よりもめんどくさい。だからこそ何もしていらないのに伝説の勇者だなんて嘘とわかつっていても気持ち悪い。

「あの……そういうお世辞とかはいいので……」

ラトが遠慮したように言つた。ラトもこの人の態度には少々気味の悪さを感じるのだろう。

「いやいやお世辞じゃないよ。ご機嫌取り……おつとこれは本音が……失礼」

「アンタ今ボロ出したな？ご機嫌取りつつたな？」

チラリとどころじゃないボロの出方を目の当たりにし、問い合わせようとすると、やはり話を聞かず何事もなかつたように男は話を進める。

「この村には劇場もあればのどかな自然もある。愛くるしい動物もいる」

体全体で村の空気を体感している彼に、私の文句が届くことは無かつた。

右に向いていた首は左に向き、村全てを自分に取り込んでいるかのようにもみえた。

「もつとも、それはどの農村にでもある風景。この村が他と違うのは……」

「もしかして……」

「そう、人を不老不死にするという不思議な術を使う『救済者』様がいることだ」

「やつぱりそうか！お兄さんありがとうな！」

『不老不死』、『救済者』という単語に反応し、とにかく探すために酒場や家が建つ広場へと急ぐ。

後からラトやあのチャラい人の声も聞こえたが無視した。

救済者様とやらはどこにいるのか。

特に情報を聞くことも無く飛び出してしまった事を後悔した。

しかし見つけるのはそう難しいことではなかつた。

近くで『救済者』を呼ぶ声が聞こえた。

# 謎の宗教

救済者を呼ぶ男はすぐ近くにいた。

跪く男の前には白衣装の女があり、男に優しい笑みを向けていた。  
女は男に手をかざし、ゆっくりと瞼を閉じる。

その様子を私は遠くからじつと見ていて。

「ねえ、置いていかないで」

ふと、後ろから怒り気味の低い声が私の肩に手を置いた。

一瞬警戒はしたものの、声の主は先程置いていつてしまつたラトだと遅れて気づく。  
振り返つて顔を見るとジト目でこちらを睨んでいる。そこそこお怒りのようだ。

「ごめんって。あ、ほら、あそこで不老不死の儀式してるよ」

「もう終わってるよ」

氣を紛らわせるために言つたものの、ため息混じりにスパツと軽く返されてしまつ

た。

急いであの2人の方を見ると、男はもう立ち上がつており、不老不死の説明を終えた  
あとだつた。

「その力、淀むことなく美しき世界のため尽力して下さい。では……素晴らしき世界へようこそ」

震えた声で礼を何度も言う男に、私は嫌悪感を抱いた。『素晴らしき世界へようこそ』という女の言葉も、私にとつてはゾッとするものだつた。なるべく見つからずにこの場から去りたい。そんな私の願いは叶わなかつた。

「あら、貴方も神の奇跡を賜りたいのですか?」

「いや別に」

この女の話など聞く氣にもならない。あんな宗教地味なもの、興味もないし入りたくない。信じていなきものを無理やり信じさせられる、そんな感じだつた。

「奇跡を受けると永遠の命を手に入れることができます。与えられた生は、神のため、世界のために尽くすことになります。その覚悟はありますか?」

「いや……僕達受ける気は無くて……」

「おや……貴方達は神の加護をお持ちのよう

「よく分かりましたね」

「神の奇跡を頂戴するのは、旅が終わり加護が終わつたあとでも遅くないでしよう」

私達が冒險者とわかつていただけかもしないが、彼女は私達が神の加護を持つている事すぐ見破つた。

受ける気は無いと言つたのに、それでも神の奇跡とやらを勧めてくるとは相当受けて欲しいのだろうか。

突然、彼女は何かを掲げるように手をあげた。

見方によれば神に願うようにも、我が身を捧げるようにも見える。

「救いを求める人は沢山いるのです。人々を、一人でも多く救うのが神が私に与えてくださった宿命なのです」

そう言つて彼女は一礼し、去つていった。

ラトの顔を見てみると、先程の不満げな表情はなかつた。だが別に笑つているわけでもなかつた。特に怒つて いる様子もなかつたので多分、話しかけても大丈夫だろう。

「冒険終わつたあとにだつて。受けたい？」

「やだよ」

「だよね」

彼女は本当に人を不老不死にしているのだろうか。私は全く信じられなかつた。仮に魔物に倒されて平氣だつたり、街で死んで生き返つたとしても、寿命で死ぬだろう。

正直、もう関わりたくは無いので今すぐこの村から去ろうと思つた。

だが、やはり不老不死が本当なのか気になるところもある。ここから去るか不老不死の正体を突き止めるか、どうしていいかわからず葛藤していると、

「あら、おふたりさん。いいところで会つたわね」

ツインテールをした元気な女の子が来た。

一応、冒険者としては先輩のエナだ。

「あいつらの話、聞いた?なんか、うさんくさくない?」

「おう、全く信じられんな」

「あいつは新興宗教の勧誘員。死ななくなる術を人々に施してゐるんだって言うけど本当の目的が全くわからないの」

「それつてこの村の人以外も受けに来てたり?」

話が長くなりそうなので、オブジェの段差に座つて話を続ける。

ラトの質問にエナはうん、と頷いた。

「そりや、確かに私達『冒険者』も神の加護を受けているから同じように死ぬことは無いけど……それとは全く別のものに見えるのよ」

「やっぱりあれはアイツらのそれっぽい魔法だつたりするのかな……。宗教の為に洗脳してるとか?恐ろしいな」

寒気がして思わず二の腕をさすつた。

それが本當だとすればなんとかしなければいけない。エナも同じような考えだつたらしく、嫌な予感がするとの事。何かを情報が入り次第報告し合おうと約束し、エナは

この場を離れた。

ついでに、彼女はまたパートナーとはぐれたらしく、パートナーのマナを見つけたら  
言ってくれとも言われた。

エナが去った後、私達の周囲には数秒の静寂が訪れた。

「とりあえずその辺歩こつか。この村がどんな所か見てみたいし」

「だね。歩いてたら何か見つかるかもだし。行こうか」

# 救済者 ケイト

私達はしばらくその辺をブラブラと歩いていた。

あまり時間はないかも知れないが、ゆっくりと2人で自然の中を歩くのも悪くなかった。

もう少しこの時間が続いて欲しいと思う。

「冒険始めてからこんな感じで歩く機会、あんまりなかつたね」

「うん。アブルにいた時は街の外には出してもらえなかつたもんな。自然の中を歩くのつてやつぱりいいな」

心地よい風に当たりながら、透き通つた水が静かに流れる川の橋を渡りきる。ちょうど村を一周し終わる。救済者はいなかつたとエナに伝えるためエナを探していると、近くにある1件の家に、エナが誰かと言ひ合つてゐる姿が見えた。

「エナ！」

「ああ、ちょうどいい所に來た」

彼女が話していた相手はなんと探してゐたあの救済者だつた。不機嫌そうな顔をしていたエナだが、私達が來ると少し自慢げに口角をあげた。

どうやら工ナ達が立っている後ろの家に寝たきりの老人がいるらしく、その老人に奇跡をかけてもらい本当かどうか見極めたいので一緒に証人になつてくれとのことだつた。

寝たきりの老人が立つことが出来れば確かに本当だとわかるだろう。だが老人は不老不死になる事を望んでいるのだろうか。

その事を問おうとした時、既に工ナは救済者の服を引っ張り家に入ろうとしていた。「順番もありますから、その人だけ特別という訳には……」

「やつぱり不老不死は嘘か？」

救済者はかたくな家へ入ろうとしない。

やはり怪しいと思つていた矢先、工ナは威張るように

「こういう寝たきりの人ほど助けなきやいけないんじやないの？それとも、動ける人しか助けられないっていうの？」

と救済者を煽りまくつた。拳を握りブルブルと震えている。これには温厚そうな彼女も我慢ならなかつたのか、むつとして

「そんなことはありません！」  
と、自分から家へ入つていつた。

それを追いかけるように満足そうな顔をした工ナが家中へ。

「私達も行こう」

「うん」

中に入ると、ベッドに老父が寝ていた。

機嫌が悪いのか、顔はしかめつ面。眉間にシワがよつており、いかにも奇跡を受け入れてくれそうな感じではない。

「私は『救済者』ケイト。頼まれて貴方に奇跡を授けに参りました」

ケイトと名乗つた救済者は恭しくお辞儀するが、老父は表情を変えず、寝たきりの状態で

「そんな得体の知れんモノはいらん！帰れ！」

と、力強くも掠れた声で怒鳴つた。老父は奇跡を断つた。やはり受けたくなかつたのだ。無理やり受けさせる事もない。なりたい奴にあたればいい。

「エナ、もうやめ……」

「あのさ、おじいさんさ、奥さんが可哀想じやないの？」

奥さんの話が出た瞬間、老父の体が一瞬ピクリと動いた。エナは中々汚い手段を選んだ。

奥さんのためだ、奥さんを悲しませてもいいのかと言いたいのか。頑固そうなこの老

父でも、奥さんの悲しむ顔は見たくないはずだ。

「フニエはワシがいない方がいいんじゃ！人のことはほつといてくれ！」

また怒鳴つたが、それはエナ達に言つてゐる、と言うよりも自分に言い聞かせてゐるような感じがした。

こんなに言つてゐるのだからもう術は諦めよう。エナに言おうとするも彼女は止まらない。

「そのまま意地張つてポツクリ逝くくらいなら怪しげな術でも受ければいいじゃない。怪しげな術が失敗したつて、このまま逝つたつて！結果は一緒なんだから。少しは未来を見なさいよ！頑固ジジイ！」

エナは未来を見ると言つてゐる。生き延びることが出来るかもと言つてゐる。だがエナが見たいのは、純粹に元気になつて立つてゐる老父では無い。いや、元気になつている老父見て「術は本当だつた」という事実が見たいだけだ。

「やめろ！」

「嫌なら逃げてご覧なさい。どうせ手一つ動かせないんでしょ！」

「エナさん落ち着いて……！」

エナが老父に近づこうとするのを、ラトが止めようと手を掴むが、エナは軽く振り払い老父の目をじっと見る。悲しげにエナ達を見つめるラトを見て、エナに怒りを覚え

た。

「エナもういいだろ。他をあたればいい。わざわざ嫌がつてる人に無理やりさせなくてもいいだろ」

「やめるというに！」

「ほんとに。口だけは達者なのね」

「ワシはそこまでして生き長らえたくない。死んだら死んだで、それがワシの運命じや！ ほうつておけ！」

「ほら、あんたらもやつちやいなさいよ。それとも、失敗するのが怖いの？」

こんなに言つても、エナはこの人に術をかけようとしている。ここまで来ると人を殺す気分だ。いや、実際命を奪うと言うよりも、その人の人生を奪うというのか。

この人は、世界というものを、人間というものをわかっている。

だからこそ、私はこの人の思うようにさせてあげたい。この人が嫌と言つている中、無理やりに不老不死にされている所を見るのは、きっと体を裂かれる人を見るよりも辛い。

体を裂かれる人はやがて死ぬ。動かなくなり苦しみはなくなる。だがこの人は死なず、苦しんだままになる。死ぬほど痛い拷問を、永遠とされているようなものだ。

覚悟を決める前に急に死ぬのは怖い。だが、永遠に死ななくていい、と言われるの

もつと怖い。エナは、人の考え方を振り払つてまで自分の納得のいく答えを探している。  
そんなエナが1番怖い。

気づけば奇跡はかけ終わつていた。何故か特に、思うことはなかつた。老父は意外と  
すんなり術を受けた。私が思つていたような光景にはならなかつた。不幸中の幸い  
だつた。

ぼーっとしていると、ガチャ、とドアの開く音がすぐ隣でした。

「あら、おばあさん。お邪魔してわよ」

ドアを開けた者の正体は老父の奥さん、フニエさんだつた。  
優しそうな穏やかな顔。老父とは真反対だつた。

「あら、貴方は冒険者の方……」

「希望通り、じいさんは素直に処置を受けてくれたわよ！」

「あら……。あんた。これで夢が叶うわね」

嘘つけ、と出来るなら大声で叫びたい。だが、嬉しそうなフニエさんを見ると、そん  
な事が言えない。言つたら、フニエさんは悲しむかもしだれない。エナの汚い作戦にハ  
マつたのは、老父だけでなく私もだつたようだ。

「なにがじや！」

「外へ出たい！また旅に出たいって。あんたの可愛いヨメも体が動くうちに、一緒に行

くよ！」

「しわくちゃのくせに、誰が可愛いヨメじゃ？」

「そんなしわくちゃにあんたが一目惚れしたんだろ!?」

「そんな昔の話、忘れたわ！」

この2人の微笑ましい会話を聞いていると、さつきの感情が嘘のように消えていく。

老父の声も、先程の掠れた声とは違い、ハキハキとした強い声だつた。

フニエさんも面白く、老いていくと気になるシワやなんやらを気にせず、それをチャームポイントとして自信満々に話している。

悲し気な顔をしていたラトも、いつの間にか微笑んでおり、こういうのが理想の夫婦なのだろう、と呟きあつっていた。

「ウウ……」

「フニエさん!? どうしましたか!？」

が、そんな素敵な時間は続くわけがなく、フニエさんは急に倒れた。

# ご飯

「ばあさん、しつかりしろばあさん」

「あら……あんた……」

フニエさんが倒れてベッドに寝かせて数分後、フニエさんは弱々しく目を開けた。

「ワシの面倒を見るのに無理をさせちまつたな」

「いいえ……それよりも……じいさん、おなかはすいていないかい？」

眉を下げ申し訳なさそうに言う老父に、フニエさんは気にせず、優しい笑顔で聞いた。

今、なぜそんな事をきいたのか。唐突に聞いてきたので、その場にいた全員は一瞬わけがわからなかつた。

「なんだ、突然に」

老父は戸惑いながらも聞いた。

まさか、自分の死を悟つて……と縁起でもない事を考えてしまつたが、そんなことは無かつた。

「だつてもうご飯の時間だよ」

「無理をするな！ そんなのはワシが！」

「あら……あなたが元気だった時もあなたが食事を作ってくれた記憶なんて私にはないけどね？」

フニエさんはクスクスと笑いながら懐かしむように、でもすぐに消えそうな声で、言つた。

辛いはずなのに、それを隠すように笑うフニエさんを見かねたエナが、痺れを切らして

「……ああ！もう！今日は寝てなさいよ！後で酒場から調達してあげるから！」

と、珍しく人を気遣つた。

やはり我慢して笑っていたのか、だんだんと笑みが無くなつていき、フニエさんは俯いて

「…………すまないね…………」

と呟いた。

なんだ、エナも優しいところあるんだなと関心して、完全に気が抜けていた時だつた。

「あ！行くのは私じゃなくて……」

エナはそこまで言うと、純粋無垢な笑みを浮かべながらこちらに目線をやつた。

「このふたりなので、お礼はそちらへどうぞ！」

「うあつ？」

流れ的にはどう考へてもエナが行く流れだつたはずなのに、予想の斜め上を行つた発言に思わず間抜けた声が出る。

本人は悪気などは一切無いようだが、ちゃんとわかるように言つて欲しかつたというのはあつたりする。

「レツコ……僕一人で行こうか？」

「ううん。私も行く」

「本当に……すまないね」

別にめんどくさいってわけじゃない。ただ、いきなり来たことにびっくりしただけだつた。

でも、ラト達には「めんどくさい」と思われてしまつたのか、少し反省した。

本当に少しだけ。

「いや、すみません大丈夫です。行つてきます」

ちゃんとした謝罪はできず、ちよつともやもやとした感情を抱えながら酒場への道を走つた。

さつきラトとゆっくり歩いた道は一瞬で過ぎ、私達が走つた事で踏まれた花や草が次々と地に這い蹲る。

さつき時間をかけて目に焼き付けた風景は一瞬で変わつた。

酒場は、すぐに着いた。

カラソカラソとなるドアを開けると、大きな体の男と、椅子とテーブルが並んでいるだけだつた。

男のエプロンの左胸に、「ロツク」と書かれた名札がある。彼はロツクという名なのだろう。

ロツクは険しい顔をして私達をじつと見つめる。

「冒險者がこんな田舎の酒場に何用だ？」

口を開いたかと思えば軽く皮肉を言われる。

冷やかしに来たとでも思われているのだろうか。

さつさと要件を言つた方が早い。

説明が下手で丁寧な言葉が使えない私よりも、説明が上手で丁寧な言葉を使えるラトの方が、頑固そうな男に話を聞いてもらいややすかつた。

「なに？フジのじいさんが元気になつてフニエさんが倒れたつて？」

なるほど。じいさんの方はフジという名前なのか。

一通り話すと、ロツクは血相を変えて2人に渡すご飯をすぐに作り始めた。

最初は驚いていたロツクだが、徐々に落ち着いてきたのか手元が焦つたようなドタバタした動きから、だんだんと丁寧な動きになつていつた。

「そうか……ついに救済者の奇跡を受け入れたんだな」

ロツクは呟くようにいった。

説明の理解が早かつたり、「ついに」と言つてゐるあたりあの老夫婦はロツクと相当仲がよかつたのだろう。

「この村は、あの救済者のおかげで、賑わいを取り戻した。本当に彼女が来てくれて、よかつたよ」

手際よくクロケットをバスケットに入れながらロツクはこの村について話してくれた。

だが、やはり不老不死という単語を受け入れることは難しかつた。

不老不死で村が復興……なんだかわからないが、何故か、「嫌」という感情がそこにあつた。

「ど、できだぞ。このクロケットを届けてやつてくれ。これなら歯の弱い年寄りも食べられるし力もつくぞ！」

バスケットをラトに手渡し、軽く微笑むロツク。単純な事に、こんな小さく口角を上げただけでも私はホッとしてしまう。それは、人が笑つてゐるところが好きなラトも同じだろう。

その小さな微笑みに、お返しするかのように小さく笑い、

「ありがとうございます」

と、私達は酒場を出た。

自分の考えが単純すぎる事を少し気にしながらラトが持つクロケット入のバスケツトを、少し懐かしむように眺めた。

## 幸せな夫婦喧嘩

「昨日まで、あんなうさん臭いもの受けないって言つてたくせに。人がいない間に受け  
るなんてどんな当てつけさ！」

「あー……これは……」

「喧嘩……してるねえ……」

2人が家に食事をもつて戻った時、2人をパシッたエナはおらず、代わりに元気に起  
き上がりつているフニエがおり、フジと口喧嘩の真っ最中だつた。  
さつきまで倒れていたようには見えないほど大きく声をだすフニエに、フジは負けじ  
と張り合う。

「当てつけだと？ 違うわ！ お前みたいなうるさいババアと暮らしどのが嫌になつたん  
じゃ！ だから、元気になつてもう一度、冒險の旅に出るんじや！」

フジは半ば無理矢理受けさせられたという事を話さなかつた。意地を張つてゐるつ  
もりなのか、本心なのか、それはレツコ達にはわからなかつた。  
ただ、最後の「元気になつてもう一度冒險の旅に出る」という言葉は嘘ではないと、2  
人は感じた。

「ハハツ！笑えない冗談だね！若い連中と同じように旅に出られると本気で思つてゐるなんてさ！」

「出られるぞ！そして、昔みたいにどこかの村の美しい娘さんとまた恋に落ちるんじや！」

「そんな危険な！あんたみたいなジジイの被害者が私の他に出ないよう監視について行くしかないね！」

「シツシ！ついてくるな！お前がついてきたら旅が台無しじや！」

「台無しなら、最初つから旅なんて出なくれいいだろ？」

老夫婦の口喧嘩の前では、若者のレッコとラトも蚊帳の外。止めることもできずただそこに突つ立つてゐるだけだつた。

老夫婦は2人が入つてきた事にも気付いていないらしく、目の前の相手しか眼中になかつた。

「終わりそうにないし、外でちやう？」

「うーん……僕達いない方がいいかもね……？」

勝手に出ていくのも失礼だと思つたが、終わる気配もないので、2人は仕方なく置き手紙でも添えてクロケットを置いていこうとした。

だがラトがメモを取り出そうとした時、急にフジが静かに言つた。

「……一緒にいてほしいんかの？」

たつた数秒前まで、頑固で、まるで喚く子供のように怒鳴っていたフジが、哀れむかのように言つた。その豹変ぶりに、レツコもラトも動きを止めた。

「そんなんじゃないさ！」

フニエは否定するが、フジは聞かない。

「いてほしいんなら、しようがない、いてやろう」

「違うって言つてるだろ？耳が遠いから年寄りは嫌だねえ」

一瞬仲直りの雰囲気になつたと思ひきや、またまた雲行きが怪しくなつてきた。  
2人に気付く可能性も、だんだんと薄れてきていた。

「自分だつて年寄りだらうが！」

フジが怒鳴つた途端、フニエは呆れてフジから目線を逸らし、ちようどレツコ達の方を見た。

「あら、冒険者のお二人。ありがとうね。食事を持ってきててくれたんだね」

フニエは話題をそらすかのように話すが、レツコには幸いだつた。

「いえいえ。お待たせしました。どうぞ」

ラトがバスケットを手渡すと、フニエは微笑んでフジに話しかけた。

「あらクロケット。久しぶりだねえ。さあ、じいさん。お腹がすいてるんだろ？どうだ

い？」

「ふん。……こんなもの。いつものスープの方がよっぽどうまいわ！」  
クロケットをかじりながらまた喧嘩か、と思いきや、フニエのスープを褒めた。  
素直でないフジを見てフニエもフフフと優しい笑みを浮かべていた。  
もう喧嘩などしていなかつた。

「邪魔しちゃ悪いし、出ようか」

「うん」

仲の良い老夫婦の家を静かに出る。

家の外でも、少し開いた窓の隙間から2人の話し声が聞こえる。

そんな2人をラトは羨ましく思つた。

「フジさんとフニエさんの夫婦喧嘩、なんだか幸せな喧嘩だつたね」

「ん？ そうなの？……よくわかんない……」

「レツコには難しい話だつかかな……」

「なに！ 私がバカつて言いたいの！？」

「いや？ 相変わらず脳筋だなーって」

「はあ！？」

ラトが、こんなやり取りも幸せだと気づくのはもう少し大きくなつてからの話。

# 魔王？再び

「おお、お前らか。大変な情報が入ってきたぞ！」

そう騒ぐのは公国の酒場の店長、チップ。

濡れ衣騒動でお世話になつた事もあり、レツコ達との距離はかなり縮まつていた。

「紅茶2つとゲルミアヒージョ1つ！で、大変なことつて？」

「以前、お前らが倒したネズミの魔物覚えてるか？」

昼過ぎだつたので客はあまりおらず、チップとも話しやすい。普段はあまり使わないカウンター席に座り、チップと話しやすい環境を作つた。

「ああ！あの武器盗んだやつか！」

「その魔物が、トッポ、と名乗つたというのは本当だな？」

チップはそうききながら、2人に紅茶を差し出した。

「んー。どうだつたつけ？」

「確かにトッポって言つてたよ。忘れたの？」

本気で忘れていそうなレツコの脳に、濡れ衣事件の事を叩き込むと、彼女は徐々にに思ひ出した。同時に、苛立ちも湧いてきたらしく、トドメに嘘をつかれたことを言うと、

苛立ちが絶頂に達し、完全に思い出したらしい。

「アーヴィーかあ！ 確かにトッポつて言つてたな！」

「うん。思い出してくれてよかつたよ。だから一回落ち着こ？で、それがどうかしたんですか？」

ギヤーギヤーとあの時の文句をぶちまけるレツコを抑え、ラトは問う。

レツコが机をバンバンと叩くせいで紅茶がカップの中で波を立てる。

「魔物に名前はない。知つているな？」

「こ」まで言つてまだ気づかないか？とチップは目で訴えるが、ラトは流石に気づいたようだ。だが、レツコはよくわからない、という顔をして眉が八の字になつている。

「てことは」

「トッポと名乗つたそいつは、魔物では無い。あいつは……」

アヒージョを作る手を止め大袈裟に言葉をためたので、思わず2人は手に取りかけていたカップから手を置き、ゴクリと息を呑む。

「魔王だ！」

「ええ……あれが……？」

どんな事かと思えば、なんとなく想像していた事で、なおかつトッポは全く魔王という感じがしなかつたため、レツコもラトも呆れ返つてしまつた。

それに、トッポが魔王という事は直接張本人の口から聞いていたので、特に驚くこともない。

「魔王……それは魔物を支配し、人類に戦いを挑んでくる恐るべき存在よ。魔王は決して死ぬことは無く、倒してもより強くなつて再び人類の前に立ちはだかる永遠の敵なのだ」

真剣な顔をしてゲルミアヒージョをレツコの前に置くチップを、レツコはただただアホなんだろうと思い半目で見ていた。

熱々のアヒージョをふーふーと冷ましながら口に運ぶレツコを見ながらラトは魔王についての話を聞き流していた。

「トッポが再びあの地下に現れたらしい。やつが魔王であるなら危険だ。二度と関わらない方がいいだろう」

そこで言いたい事を全て言い切つたであろうチップは、皿などを洗いに彼女達の席から離れた。

力チャ力チャと食器の音が聞こえる静かな酒場で、アヒージョを頬張る少女は、自分を見る少年とゆっくり話す機会が出来た。

「ていうかさ、滅びの村ならリツティ達がなんとかしてるんじやない？」

「まあ、確かに……。でもほんとに強くなり続けてたらどうするの？」

「あの二人もそんなにヤワじやないと思うけど? 一応伝えるだけ伝えとく?」

「不老不死の村の事も言つときたいし、挨拶がてら見に行こうか」

「おっしゃ。んじや行こう」

レツコは残りのアヒージョを全て口に詰め込むと、チップ手を振り酒場を出た。

# 魔王、再び

「あ、れこちゃん！ ラトちゃん！ いらっしゃい！ ちょっと待つてね。もう少しで消えるはずだから」

「リーテイン様、これで10回目です。流石に一応魔王ではあるかと」

「魔王つて倒す度に強くなるんでしょ？ なんか同じように感じるのだけど」  
私達の目の前に広がる光景は傍からみるとちょっとシユールな光景だと思う。ジャージを来たオネエが、片足で魔王と思われるネズミの頭をグリグリと踏んでいて、その側でメイドと思われる女の子が虫をつつくようにそのネズミの頭を人差し指でついている。そのネズミというのは、まさしくあのトッポだつた。レイティの発言からして、魔王ではあるようだが強くなつたようには到底思えない。

「どうか、強くなつていないらしい。」

滅びの村に来てリーテイン達の家のドアを叩いたはいいものの、家から反応はなかつた。

仕方なしに先にトッポを見に行こうと地下工場まで行つてみたら、この有様。そして現在に至る。

「この子、倒れてから消えるまで結構時間かかるのねえ」

未だグリグリと頭を踏みつける彼女、もとい彼の姿は、見方によればトッポよりも魔王に見える。それもまあかなり性格の悪い魔王で。

「やめてあげなよ……。魔王といえど痛みは感じるだろうし何より可愛そうだよ……」

見ているだけで罪悪感を抱いたラトは、リーテインの悪魔のような行為を止めさせようとした。命を粗末に扱うことが嫌いな彼は、敵に対しても優しかった。つくづく甘いな、と思う。自分が生きていくための必要最低限の命は頂いても、八つ当たりで命を奪うなど意味の無い犠牲は彼は決してしない。それについては私も思う。だが

「リツティイ！ いいぞもつとやれ！」

トッポにそこそこな恨みのある私から見れば、もう少しやつてもらつてもいいと思つた。それに「次は殴る」と言つた時に私はラトに許可をもらつてゐる。リーテインが代わりにやつてくれてゐるし、なんなら私よりも優しい方だろう。しかしそんなことは彼には関係なく、ぎこちない顔をした。

「リツティイ……敵でも生きてる事には生きてるんだから……もう少し優しさというか労る気持ちというか……」

ラトは遠回しに情けをかけるように言つた。だがその言葉遣いは私にはもちろん、リーテインにも届いていない。トッポの頭の上に踵をめり込ませ、つま先は左右交互に

揺れている。やられていくとも「あ、痛そう」というのは言われなくともそこそこわかる。

「頭蓋骨を碎かない優しさ！」

「優しい！」

キランつという効果音がつきそうなほどキメ顔で彼女、もとい彼は答えた。そんな漫才のような事をしていいる私達を見て、ラトはさらに不満そうな顔をした。

「優しくない。今すぐやめてあげて」

いつもより低めの声でそういうと、リーテインは渋々と足を退けた。その瞬間、トップの体は黒い霧に包まれ消えていった。「あー……」と気まずそうな声を出すリーテインに、ラトは呆れため息をついた。

「そ、それより何か用があつて来たんじゃないの？」

取り繕うように話題を変え、ラトの機嫌を少しでも良くしようとすると、

「いや、もう解決した」

と冷たく返される。リーテインはどうすればいいかわからず、チラリとレイティを見て助けを求めた。それに気づいたできるメイド、レイティは小さく「はあ」とため息をついた。

「あのネズミの事なら心配しないで。1日1回復活するみたいだから、毎朝の運動いで

も利用させてもらうわ。いいですよね、リーテイン様」

彼女の提案に全力で首を縦に振るリーテイン。疑問形でなかつたあたり決定された事と受け取つていいだろう。この2人、というよりもこのメイドがいればトッポの事は心配いらないだろう。それに私達と比べて彼らは強い。おつちよこちよいとはいえ家を魔法で吹き飛ばした。この2人なら問題はないだろう。

「今日はお昼後の運動になつちやつたけど明日からは朝ご飯の後にでも運動しましょ」「そういう事で、もう心配ないわ。2人はゆつくりシユリンガーパー公国でお散歩でもしてみたら? 最近忙しかつたでしょ」

レイティがフフッと微笑んで言つた。確かにここ数日色んな頃に振り回されてあまり公国をゆつくり見れていたなかつた。濡れ衣、裁判、不老不死。公国を観光しようと思ふこともなかつたし、ましてや公国を見て回るなんて暇、1秒たりともなかつたのだ。せつかく提案してくれたのだ。たまには2人でゆつくりしよう。

「そもそもそうだね。レッコ、市場でも見に行こうか?」

ラトもこうして誘つてくれている。彼にはいつも無理をさせている気がする。私が無理に強いモンスターに戦いを挑んで死ねば、彼は一緒に倒れるかもう無い体力を死にものぐるいで使って逃げて教会まで来たり。たまには、休んでもらわないと。「うん。夜ご飯まで公国観光しよう。リッティ、レイ、ありがとう!」

「またお礼しに来るね！」

2人にお礼を言い、私達は滅びの村を後にした。

# 市場へ行つてみよう

リーテインとレイティと別れ、再び公国へ戻ってきた2人。公国の入口の大きな扉の向こうは、冒険者で溢れていた。いつもそこで集まつて遊んでいる者、ずっとそこに立つている者、ボンド勧誘をしている者。メンツはそんなに変わらないので、見覚えのある人も何人かはいた。皆のんびりしており、仲間と駄弁る為にここへ来ている者もいれば、ただただ休憩する為に来ている者がいた。たまに奥の方から走つて来る者や重い足取りで酒場に向かう者は死んで復活した者だろうか。一つと見ていているだけでも色んな情報が入つてくる。レツコとラトは休憩に来ている者に入るだろうか。

「なあなあ、私市場見に行きたい」

レツコはラトに言つた。

「僕も見たいのあつたし、いいよ」

軽く会話をしながら市場へと向かう2人。大きな桜の木が2本立派に生えており、時折何か光つて上へ上へと上昇している。その神秘的な桜の木に、レツコは珍しく興味を示した。

「あれ、動物にしか興味なかつたレツコが珍しい。気になるの？」

「私は自然も好きだしこういう神秘的なもんも好きだよ」

重力を無視して軽々と上へ登つていく光の玉をずっと眺めるレツコ。彼女が飽きるまで見ていようとラトも桜の木に1歩近づき視線を移す。レツコはこの桜の木が人の魂を食らつて育つている、とシンシアが説明してくれたのを思い出す。だがそれは死んだ人間の魂か、生きた人間の魂か。それはわからなかつた。

「前者ならまだわかる。けど後者だつたらここに住んでる人達や私達も危ないのでは？」

変わらずそれを見続けらしくないことを考えるレツコ。今こうして吸い込まれるようになっているが、本当に吸い込まれていたらたまつたもんじやない。レツコはそろそろいいだろうと後方にいるラトを呼んだ。

「ごめんラト。もう大丈夫。市場行こ？」

「ん？ もういいの？」

ラトの方へ向かいながら「うん」とレツコが頷く。「それじゃあ行こつか」とラトが先を歩くと、それにレツコは小走りでついて行く。ラトとレツコでは歩幅が違うので、普通に歩いているだけでもレツコは小走りしなければいけない時がある。だがラトはそれをちゃんとわかっているので、レツコが小走りすると歩幅を合わせる。レツコは追いつくのに必死でラトの気遣いなんか気づかない。だがそれはそれで可愛げがあり、ラト

はよくあるその光景を楽しんでいた。

市場には鍊金素材から日用品までズラリと並んでいた。他にも、本や人形などのおもちゃもあり、何でも揃っているので見ていて飽きることは無かつた。

「あ、この青いピアスラト似合いそう」

「ホント？ でも耳たぶに穴開けるの怖いな……」

「それはすっげえわかる」

色々な商品を指さし話しながら買い物を楽しむ2人。しばらくそうしていると、何やら騒がしい4人組がこちらへやつて来ている事にレツコは気づいた。ラトに声もかけずレツコはその4人組を凝視する。

「よつしやアタリきたー!!」

「げー……俺また使えねえの出たよ……」

「早く売つといでよ」

「おう、そうする」

「んじやちよつと行つてくるね！」

4人組のうちの2人がこちらへ向かつてきました。先程嘆いていた男が、市場の店番をしている少女に武器を渡し、青い石を受け取つてているのが見えた。

「ホント最近ガチヤ運ねえよな」

「日頃の行いじゃない？また石溜まつたら回そうね！」

「また爆死するのか？勘弁してくれよ」

そんな事を話しながら2人は仲間の元へ戻つて行つた。レツコはラトの肩をちょいちょいとつつき、「ガチャつて何？」と聞いた。ラトもあまりわかつていないらしく、「さあ……？」と首を傾げるだけだった。その会話を聞いていたのか、先程の店番の少女が声をかけてくれた。

「貴方達冒険者になつたのは最近？ガチャつていうのは賢者石で武器や装備を召喚する事を言うのよ。貴方達もやつてみたら？いらないものが出たら、ウチで鍊金石と交換してあげるわよ！」

少女が親切に教えてくれ、レツコもラトも興味を持つた。

「へえ……。やつてみる？」

レツコがそう聞くも、ラトは少し不安と疑問があつた。  
「うーん……それって石がどれくらいでできるんですか？」

「1回だけするなら300賢者石、11連なら3000賢者石ね。たまに5連1200賢者石で出来るものもあるけど、基本はそれくらいよ。一時期は賢者石のインフレとかで5000賢者石の時もあつたけど……」

熱く語る彼女についていけず、レツコは早々にダウン。ラトは頑張つて聞いていた

が、情報量が多く流石に処理できなくなってきたらしい。

「へ、へえ……じゃあ11連なら1回できるね……レツコ……」

「経済の話終わつた……？ぜんつぜんわかんないんだけど……。あ、11連？やつてみよっか」

「やつてみる」、その言葉を聞いてようやく彼女は話に急ブレークをかけた。ガチャのやり方を教わり、ちよつとその辺でやつておいでと勧められた。じやあまた後で、と別れた時だつた。

「私はルーチエ。いつもここにいるからいつでもおいで！」

と大きく手を振り言つてくれた。レツコとラトは手を振り返し、桜の木の下でガチャをしてみることにした。

## ガチャと不思議な鳥

賢者石。何気なく集めていたらいつの間にか袋に入っていた不思議な石。この石がどんな物か、魔物の女の子に教えて貰つたが忘れてしまつた。一つ一つはとても小さく、基本は手のひらにも満たない小さなひとつの中の石が100個の賢者石の集まりとなつていて。これを30個、手に持ち魔力を送るのだ。

「えつと……賢者石を30000つて多いな……これを……わつすごい！1つになつたよ

!!

「見て！石の中になんか見える！」

3000個の集まりとなり、1つになつた賢者石は形はあまり変わらないものの、片手いっぱいの大きさまで大きくなつた。その中にはぼやつとだが、魔物の姿が2体見える。ラトが魔力を送ると、だんだんとはつきり見えてきて、ついに姿が見えた時は2人とも驚いた。

「あ、この子つて魔物ちゃん!?」

「もう一体はゲルミだ！」

何度か出会つた魔物の女の子。賢者石について教えてくれた魔物の女の子。魔物

ちゃん。その子が何故賢者石の中にいるのか。2人は不思議でたまらなかつた。だが必要な分の魔力は送りきつたので、魔物ちゃんはその場に留まることはなく、ゲルミを持つてゐる杖で叩き消した。

「なんかレッコみたいな戦い方だね……」

「私ここまで殺伐としてない」

「あ、オークだ」

「聞いてる？」

レッコの文句をスルーし、続けて賢者石を覗くと次はオークが現れた。魔物ちゃんは、変わらずオークも一撃で倒した。その後だつた。

オーケが消えた後、何と見たことも無いドラゴンが現れたのだ。

「え!? 何これ! 見たことないよ!」

「魔物ちゃんこれ大丈夫なのか? 危ないって!」

2人は騒ぐがそれが魔物ちゃんに届いているはずも無く、魔物ちゃんはいとも簡単にドラゴンを倒した。呆気なく光の粒となつたドラゴンに2人は驚くも、いつもの魔物と同じようにその場所に宝箱が出現した。宝箱が開いた瞬間、賢者石は弾け飛び11個の欠片になつた。武器や防具、アクセなど計11個のアイテムに欠片は変化し、2人の目の前に並んだ。

「えーっと……。これは帽子かな、んでこれは剣……レツコ剣使つたら？」

「使いたいのは山々なんだけど杖の方が強いんだよなあ……。でもクリスタルみたいでかつこいいな……」

「だつたら一応持つとく？あ、服だ。取つとこう。これは……アクセかな？サザンスター オウルだつて」

「動物がアクセってお前……毛皮着てるセレブじやないんだから……」

「武器や防具を一つ一つ拾い上げては分別し、また拾い上げて分別しを繰り返し、やつと残り1つのサザンスター オウルを拾つた時だつた。突然サザンスター オウルがラトの手から羽ばたいて逃げ、ラトの頭に着地したかと思えばサイズが少し大きくなつた。

「えつ!? どういう事!?

「飛んだ……！ デカくなつた……！」

「吾輩は魔力を持つので自身の大きさを変えるなんぞ朝飯前である」

昔の人のような話し方でその鳥はレッコ達を見下している。驚きを隠せない2人の顔をじっくりと見て、フツと馬鹿にするように鼻で笑つた。

「間抜けた面のヤツに召喚されたようだな。まあ仕方ない。おいそこの。吾輩は名がない。名を持つことにより更なる力を得られるのだ。名をつけよ」

どこまでも上からな鳥に、ラトは混乱しレッコは腹が立つた。だがラトの上に居るた

め、掴みかかろうとしても飛ばれてお終い。ラトに被害が行く未来が珍しく予想出来た。いつもは考える事は苦手なレツコが、今回は珍しく脳みそを回した。ずっと自分を睨みつけるレツコにイライラしたのだろう。鳥はもう一度名付けを催促した。

「さあ早く名を」

「ボルシチ」

「は?」

鳥が言い終える前にレツコは名前を叩きつけるように言つた。

「お前は今日からボルシチ。ほら立派な名前だろ」

「ウツソだろお前!」

適當な名前をつけられた事により、サザンスターオウル、もといボルシチはレツコの鼻の先まで飛んできた。モフモフの翼でレツコの顔をがつちりホールドし、頬を足でキュッと掴んで離さない。頭が開放されたラトは、レツコの顔面に張り付いたボルシチを剥がそうとしたが、足の爪でレツコの顔が引っかかるのことを恐れその場でオロオロするのみだった。

「おまつ、名前つけるとは言つたがもうちよいかつこいい名前つけるやろ!?なんやボルシチて!!しかもお前きつちり魔力まで送りやがつて!ワイの名前ボルシチで決まつてもうたやんけ!!どうしてくれんねん!!!」

先程の古臭い喋り方とは一変し、独特な喋り方でレツコに詰問し始めた。

「名前つけろつつたのはそつちだろ！」

「まさかそんな名前つけるとは思わんかつたんや！」

「相手を見誤つたなこのクソオウル!!お前はずつとボルシチつて名前を背負つて生きるんだよ!!!」

「おまええ……!!!」

「ストップ！ストップ！落ち着いて！」

レツコとボルシチの言い争いは徐々にヒートアップしていく一方で、ラトが止めようとしても止まる気配を見せなかつた。

顔と顔が密着していると言つても過言ではない体勢でよくあんなに喧嘩ができるものだ。

ラトは冷静に考えるとだんだん馬鹿らしく感じてしまつた。

「もういいよ。死ぬまでやつてれば……」

いつかレツコがラトとリーテインに言つていた言葉をそのままそつくり返してやり、ラトは桜の根元に腰掛けた。そこでやつとレツコはラトに見放されたことに気づいた。「えつ……ごめ……ごめんもうやめる。ルーチエさんのとこ行つて武器引き取つてもらお……？」

ついさっきの威勢のいい声とは一変し、少し弱々しい声で謝る。ボルシチはその様子に少し首を傾げたが、空気を読んで自分も何も言わなくなつた。

「大丈夫。ごめんね。ルーチェさんのところに行こうか」

ラトは申し訳なさそうに笑つて言う。ボルシチは再びラトの頭に乗り、先程のでかい態度ではなく少し優しい口調で

「お？ 下取りいくんか？」

とラトの顔を覗き込んだ。

「うん。僕達さつきガチャの存在を知つて、今からその下取りに行くところだよ」

「そうか。新米冒険者やつたんか」

「まだ冒険に出てそんなに経つてないし。分からぬことだらけなんだよな」  
ラトがおしりの土をパンパンと払つて、さあ市場へ、と思つた時だつた。

「ところでお前、杖持つとるけどお前占星術士か？」

ボルシチがレツコの星夜銀漢杖をじっと見つめ聞いた。

「いや、幻術士だ。昔幻術を少し習つてたから」

「幻術士つて短剣が1番力出しやすいんやなかつたつけ？」

そう呟いても答えられるほどの手練の冒険者は周りにいなかつた。ボルシチは「うーん」と少し唸つたあと、「そうや」と何か閃いたのか目を見開いた。

「お前杖使えるんやつたら占星術もやつてみいひんか」

「レツコは杖使つてるけど物理型だよ！やめといた方がいい！幻術だつて結局途中で逃げたらしいし！」

「幻術士だけで十分だ！占星術なんて習わん！早く市場行こうよねえ!!」

2人がいきなり声を張り上げたのでボルシチは思わず怯んだ。同時に当初の目的からかなり脱線していることに気づいたボルシチとラトは、この話は後でしようと話し合つた。レツコはそんなのしなくていいと言つたが、「知識が増えたら強くなれるよ」と言われ仕方なく占星術の指導を受ける事にした。

市場では、ちゃんと武器を下取りしてもらい、鍊金石を受け取ることもちゃんとできた。

# パートナーとの別れ

「経済つてこうやつて回るんだなー」

「ちゃんと経済の意味わかつてんのか?」

下取りも無事終わり、2人と1羽は公國の外でレツコの占星術授業の為大きな門へと向かっていた。酒場の前を通る頃だった。

「あれ、ハンカチがない」

ラトがカバンやポケットをガサガサと2、3回ほど探る。今までの行動からハンカチを出した動作は一度もないが、何かに引っかかつて落としたのかもしれない。

「えー。落とした?」

「かもしだれない。市場かな? ちよつと探してくるから2人ともその辺ブラブラ歩いて」

そう言つた声は少しづらしかつた氣もしたがレツコはそれを気にしなかつた。

市場の方へ走つていくラトが見えなくなるまでレツコはその方向を向いていた。

「歩いてつて言われてもなあ。はぐれても困るしここで待つてようや」

「ベンチどこだベンチ」

キヨロキヨロと辺りを見渡し、レツコはベンチを見つけそこに座つた。そのまま、市場やら酒場やらに向かう人々をぼーっと眺めていた。時間という概念を忘れ、ただただパートナーが帰つてくるのを待つていた。時々ボルシチが話しかけて来た気がするが、全てぼんやりと聞き曖昧な答えを返していた。どのくらい時間が経つたか分からないが、「おそい」と感じた。ラトがいないだけで時間が流れるのは遅いし、なんだかつまらない。一緒に暮らしていいた血の繋がつてない老人が、ある日突然疾走してしまった事を思い出す。あの時も、ラトが冒険に誘つてくれるまで1人で過ごしていた。老人がいなくなつた家は広くて、冷たかった。今はその時の感覚にとても似ていた。

老人は親も家もなかつた自分を拾つてくれた。料理が美味しくて、物知りで、炎の魔法のエキスパート。彼が出してくれる炎が好きだつた。触れても熱くなく、優しく包み込んでくれるような炎。自分以外には見せない、自分と老人だけの秘密の魔法。

「じいじ……」

どこにいるか分からぬ恩人を、隣にいるボルシチにさえも聞こえない声で呟いた。それもそのはず。ボルシチがレツコを呼ぶ声につぶやきはかき消されたからだ。

「なあ」

「ああ？」

「なあつて」

「うん」

「おいちやんとこっち向いて聞けやドアホ！」  
「いっただ？何してくれてんだお前！」

全く話に耳を傾けないレツコに、とうとうボルシチは腹を立てレツコの顔に頭突きした。ほつぺたをさすり痛みを紛らわせながら、人を殺せるのではないかというレベルの睨みをレツコは目の前でパタパタと浮いているボルシチに向ける。

「やつと目エ見たなお前」

「今ここでその目潰してやつてもいいんだぞ」

公国という平和な空間で密かに行われるケンカに、目を向けるものは誰一人としていなかつた。ボルシチはレツコの目をまっすぐ見て口を開いた。

「あの小僧、遅ないか」

「小僧？……ああラトか……いや小僧って呼び方もうちよつとどうにかなんねえの？？  
……確かにまあ遅い気もするかも……」

頭を左から右へゆっくり動かし、辺りを見渡して時計を見つけると、20分の時が流れていたようだ。ボルシチ曰く。

「さつき通つてきた道のり探すのに20分もいるかねえ……？」  
「ていうかそんなに探してなかつたんなら戻つてきて一緒に探そつて言わない……？」

「時間かかったんやつたら言うけどな……。でも言うて20分や。もうちょっと待つてみようや」

少し落ち着きの無くなつたレツコをなだめるように、ボルシチは彼女の隣に寄り添つて座る。ラトが来るのが遅いという事を意識すると、それまでぼーっとしていたレツコはだんだんそわそわするようになつた。何回も時計を見るしキヨロキヨロ辺りを見回す回数も増えてきた。

「遅い」

「まだ5分しか経つとらんやろが」

「もうこっちから探そうよ」

「それやと入れ違いになるやろ！ おい！ 待て座れ！」

ボルシチの制止の声を聞かずにレツコはズカズカと市場へ向かおうとする。ボルシチはなんとか留まらせようと彼女の首の後ろの布を足で掴むが、人間の力には敵わない。人の服に掴まつてパタパタと羽ばたいているかわいいフクロウの完成だ。

「下手に動くな絶対はぐれるで！」

「ラトよりも早く動けば追いつくか見つけるができるでしょ」

「無茶言つてんちやうぞお前」

やや早歩きで公国の入口を歩き回るフクロウ付の女の子。かなり目立つと思いきや

ここは数多の冒険者達が集う公国。ここではそんなもの、少し風が吹いた程度にしか思わない。

「ラトー！」

「やめろデカい声出すな！フクロウは耳ええんやぞ！」

「知るかボケ」

「占星術以外にも言葉遣いを教える必要がありそうやな……！」

言い争いながらも入口付近のテント、酒場の周りや中など街の半分が探し終わり、次は桜の木周辺を探しに行こうとそこへ向かっている時だつた。

「まだ探してゐる場所が場所やし、そうと決まつたわけちやうねんけどさ」

「もしお前逃げられてたんやつたらどうするん」

ボルシチの疑問の声にレツコは足を止めた。

# パートナーとの別れ

「は？逃げる？」

「おん。お前といるのがしんどくなつて嘘ついて逃げたとかな」

「いやいやそんなわけ……」

レツコが一瞬不安げな表情を見せたのをボルシチはしつかりと目で捉えていた。

「ほんまか？あいつはお前のこと嫌いやつたかもしれんで？」

「嫌いだつたらここまで一緒にいない。冒険にも誘わなかつたはずじやん」

ボルシチにとつてラトとレツコの2人はついさつき呼び出されたばかり。思い入れもなければ思い出もない。全くの赤の他人だ。当然動搖するレツコへの言葉も感情はない。自分に変な名前をつけた仕返しと言わんばかりにレツコのメンタルをえぐろうとする。自信満々な信頼も全て否定してみよう。少しニヤニヤしながらからかいの言葉を投げつける。

「ほら。なんか心当たりないんか

「心当たりとかそんなもん……！」

『ない』。そう言う前にレツコは口を閉じた。本當にないと言うのならラトはあんな不

自然な別れ方をしなかつたはずだ。そういえばハンカチを落としたと言つていた時、わざとらしいような言い方をしていたのを思い出す。それと同時に今まで迷惑をかけてきた記憶がじわじわと湧き上がつてきた。何も考えず敵に突っ込んで行き、先に死んでラトを教会まで走らせた事、成功する確証などないのに「行ける」「大丈夫」と言い無茶をさせた事、余計な事に首を突つ込みラトを面倒事に巻き込んだ事、エトセトラ。

逃げたくもなる要素は抜群に揃つていた。

「心当たりしかない」

「それはそれでどうなん?」

てつきり「そんなことは無い」と返される事を予想し煽る予定だつたボルシチだつたが、予想は外れ煽る前から気分を落とされ調子が狂う。最後まで反発した末に為す術がなくなり子供のように涙目になる。それをゴールと考えていたボルシチだつたが、これでは準備していた煽り言葉とシチュエーションが全ておじやんだ。どうたち直すか考えているとどんどんレッコのテンションが下がる。

「いやこれは……逃げられて当然……かもしだれない……」「急に自信なくすな」

道のど真ん中で不安げに立ち尽くす彼女の肩に止まり、自慢のモコモコの羽毛を押しつけるも特に効果はなし。「ワイの最上級のもこもこ羽毛になびかんとはお前正氣か」

などと一瞬ふざけてみるもレツコは何も言わない。

「なあ、とりあえずここ邪魔になるからちよつとこつち寄ろうや。な？」

「邪魔？ やつぱ私ラトにとつて邪魔？」

「お前そんなネガティブ思考ちやうやろ」

力の抜けたレツコの体は、ボルシチがちよつと肩を掴んで横へ羽ばたくだけで簡単に誘導できた。このメンタルだと下手したら泣きそうだと考えたボルシチはどこか人目が気にならない場所を、首をキヨロキヨロさせ探す。ちょうど桜の木への階段付近に路地裏を見つけたので、急いでそこまで誘導する事にした。

俯いたまま抵抗することもなくボルシチと共に路地裏へ入つていく様は、誘拐に近い動きに見えた。

「なんか犯罪してる気分になつたわ。お前のせいやぞ……」

「やつぱ私のせい……」

「そろそろめんどいぞお前」

ストン、と地面に腰を下ろし3角座りで俯くレツコ。レツコの杖、星夜銀漢杖はその弾みでシャラシャラと音を立て地面に転がる。「ああああ貴重な杖が」とボルシチは杖を壁にかけるがレツコは全くその様子を見ない。彼女のこの姿はきっと公国で楽しそうに話す人は疎か辺りを見渡しながら歩く人も見つけられないだろう。レツコの足元

で彼女の顔を見上げるようにボルシチが座つた。膝に顔を埋めるレツコにボルシチは仕方なしに声をかける。

「なあマジで悪かつたって。はよあいつ探しに行こうや」

「ほんとに嫌われてたらどうすんの……探しに行つてラトの迷惑になるのも嫌なんだけど」

顔は伏せたままで少し泣きそうな声で何とか会話を続ける。こんな時でもボルシチは煽りを忘れない。

「お前アホや思つてたけどそこまで頭回るんやな」

「ぶつ殺すぞ」

「元気やんけ」

暴言を履いた瞬間鋭くつり上がつた目だけをボルシチに向ける。ボルシチは怯えも謝りもしないがそこまでの暴言が出るなら今は大丈夫だろうと一旦彼女を不発弾の如くそつとしておく。

「(こ)いつは今使いもんならんし……ワイだけであいつ探しに行くしかないか……でもこいつ勝手に動いたら困るし……」

可愛らしいフクロウが地面をぺたぺたと歩き回る。路地裏から大通りを右、左、右、上へ少し飛んで右、左、右、とその場からわかる景色は全て目を通したがラトが見つかる

ことは無い。変な被り物を被つている人や、おそらく知恵をつけた魔物の一種であろう者、子供に遊びを教える老人に酒場に向かうオヤジたち。ボルシチの目から見ても青年と思えるラトはその中にはいなかつた。

「(と、なるとまだ市場の方やな……)」

ボルシチとしては今すぐ市場を見に行きたいところだが、それには下でうなだれて使いたい物にならない小娘を置いていくか連れていく必要がある。

ボルシチは感情では動かない。効率の良い方を取ろう。

じつくりと考えるためレツコの頭の上にぽふ、と乗り脳みそをぐるぐる回し始める。

連れていけば合流する時にわざわざ戻る必要はないし、うろちよろと動かれる心配もない。だが起こすのが面倒だ。置いていくことを選択すれば起こす必要はないし、1匹でささつと飛んで終わりだ。だが前者でのメリットがひとつくり返りデメリットとなる。

「(どつちもどつちか)」

貧乏ゆすりしていた足の下ある黒髪の頭を見下す。動かない。とんとんと可愛らしい足がリズム良く頭を叩いているのに全く反応しない。

「(こ)いつ……流石にすぐには動かんやろ……)」

貧乏ゆすりのリズムに合わせて頭を蹴り、ボルシチは羽ばたいた。うぐつ、といううめき声が聞こえた気がするが無視していいだろう。脳筋女だし。

「（ワイががささつと飛んで、見つけて、戻つてそれをこいつに言えばええか）」

後のことばは知らん。見つけたらそれだけ伝えよう。

結局、ボルシチはレツコを置いていくことに決めた。広い公国を滑空しながら素早く静かに飛び回る。もし音が聞こえたとするならばそれはボルシチを運ぶ風の音だろう。右、左、右、左。上から見える路地裏、桜の周り、教会の周り、一般人の開く出し物、最後に大きな市場。

5分もしないうちにボルシチは空から見える公国全てを見回つた。そして市場を見たあと、滑空するスピードに重力を合わせ弾丸のごとく路地裏へと帰つていく。

結論、ラトは市場にいた。下取りをしてもらつた店とは違う店で買い物を済ませていたようで小さな紙袋を受け取り、店員に「ありがとうございます」と言つていた。店員は「最近冒険者を狙つた野盗が出没しているので人気がない場所には行かない方がいい」と注意を促していた。別にそこまでは良かつた。それだけなら良かつた。だが運が悪かつた。

フクロウは耳もいい。だから聞こえた。

桜周りでは、冒険者を狙つた盗賊は武器が目当てという事。教会の周りでは盗賊が路地裏に入つていくのを見たものが不安げに神父に相談していたこと。そして一般人の出し物がある場所で聞いた。

「今狙われているのは杖だ」という事。